学図 小国408

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449924

文部省検定済教科書

財団法人学校図書研究会編修

# 国語四年生下

小KC
G16
ke

学校図書株式会社発行

60335
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449924

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449924

昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語科用

# 国語四年生下

広島大学図書
0130449924

廣島大學
教育學部圖書

学校図書株式会社

中央図書館

広島大学図書
0130449924

もくろく


(一) 文化の日

一 白鳥物語……4
二 はいくの話……19

(二) 漢字と新しいかなづかい

一 漢字……26
二 読めないかなづかい……32

(三) 冬の生活

一 冬の夕ぐれ……42
二 炭やき……46
三 スキーにいった……52
四 冬ごもり……58

(四) まさおくんの病気

一 まさおくんの病気……67
二 おいしゃさんの話……72
三 かぜのなおるころ……77
四 ルイ・パスツール……93

(五) アルプスの少年

一 モニイと子やぎ……106
二 子やぎのぼうけん……112
三 モニイとジョディ……119
四 歌をわすれたモニイ……125
五 モニイ楽しくうたう……131

お仕事の手びき……135
新しく出たことば……145
漢字……151

## (一) 文化の日

### 一 白鳥物語

まさおくんたちの学校では、十一月三日の文化の日に、えいが会がありました。これは、その時のシナリオです。

1 わか葉のしげっている森。木から木へ小鳥がうつる。「チチッ、チチッ」。の声。

2 深いみずうみ。水面が日にかがやいている。

3 みずうみの岸。ごぼうの葉かげで、親あひるがたまごをだいている。時々、ごぼうの葉がゆれる。親あひる、大きなあくびを



する。

親あひる「ああ、あ。つかれちゃった。まだ、生まれないのかなあ。——おや、おなかがくすぐったいぞ」。

たまごがわれる。ひなのくびが出る。「ピイヨ、ピイヨ」。の声。

ひなたちは、親あひるのまわりを走る。親あひる立ちあがる。

「みんなそろったろうね。あら、まだ一ばん大きいのが残っている。いったい、いつまでかかるのだろう。わたしはもうくたびれた」。

4 みずうみの岸。年よりのあひるがくる。歩きながら空を見上げる。

年よりあひる「ああ、いいお天気だ」。

5 青い空。白い雲が流れる。

6 年よりあひる、ごぼうの葉かげへくる。

年よりあひる「やあ、こんにちは。どんなふうかね」。

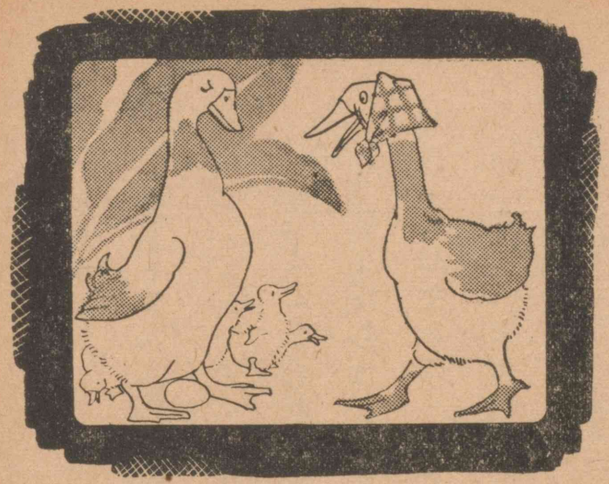
親あひる「まだ、一つ残っているんですよ」。

年よりあひる「ははあ、それはきっと七面鳥のたまごですよ。そんなものはほっておいて、ほかの子どもたちに泳ぎを教えてやるがいい」。

親あひる「でも、もう少しだいてみましょう」。

年よりあひる「では、ごかってに」。

年よりあひる、ぴょこんと頭をさげてさる。





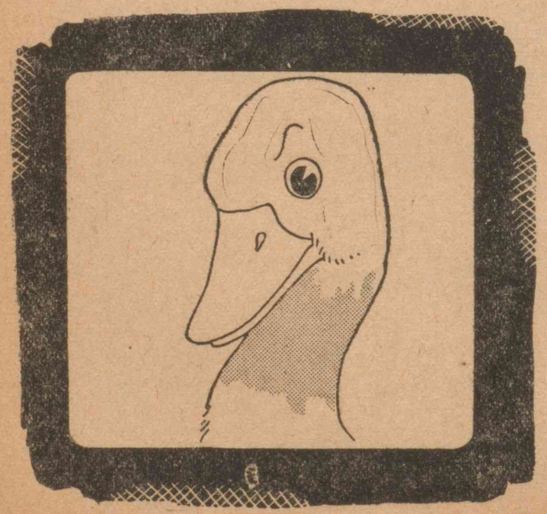
7 「それから四日目」の文字が、一字ずつ、つぎつぎに出る。

8 ごぼうの葉かげ。親あひるがすわっている。

親あひる「おかしいぞ」。たまごがわれて、みにくいひなが走り出る。「ああ、やつと生まれた。これで安心だ。おやっ——」。親あひる、じっとひなを見つめる。

9 親あひるの顔が大きく写る。目玉がぐるぐるまわる。

親あひる「これはまた、ずいぶん大きいひなだ。それにしても、へんなかっこうだなあ。ほんとに七面鳥かしら。とにかく、水



に入れてやろう」。

10 みずうみの岸。七わの親子あひるが集まる。

親あひる「みんなおいでよ」。親あひるが飛びこむ。ひなたちもつぎつぎとはいる。

11 みずうみの中。親あひるのまわりを、楽しそうに泳ぐ六わのひな。親あひるはじっと、みにくいひなを見ている。

親あひる「七面鳥ではない。やっぱりわたしの子だ。あの足のつかいかた、泳ぐしせいのいいこと。――これからみんなで、お友だちの所へ遊びにいこう」。親あひるを先頭にみんな岸の方へ泳いでいく。「クワッ、クワッ」。の声。

12 みずうみの岸を歩くセわのあひる。あしの葉がゆれる。



13 小川の岸。あひるとにわとりと七面鳥が、一つのふなの頭を取り合っている。にわとりが取ってにげる。「ココッ」。の声。

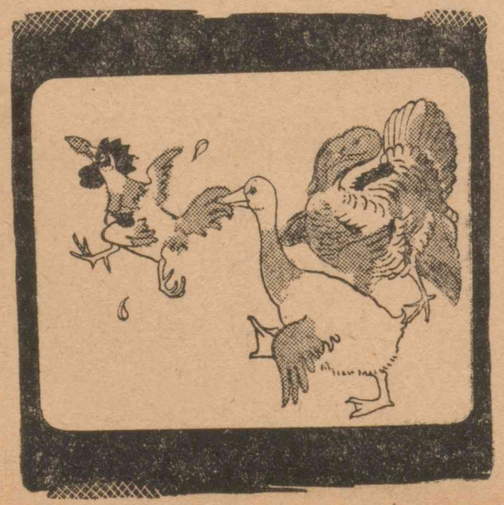
14 親子あひる、小川の岸へおりていく。みんな、取り合いをやめて、みにくいあひるの子を見る。

七面鳥「みんなごらん。なんというみにくいあひるだろう」。

「ココッ」。にわとりが走りよって、みにくいあひるの子にかみつく。

親あひる「ほっておいてちょうだい。悪いことをしないのだから」。

にわとり「あんまりみにくいから、かみつきたくなるんだよ」。



親あひる「あれは美しくはありませんが、ほんとにいい子なんです。大きくなると、きっと美しくなるでしょう。――みんながいじめるから帰りましょう」。

15 親あひる、ひなたちを連れて、小川の岸をあがる。七面鳥がからだをふくらませておっかけてくる。にわとりが頭をつつく。

ひなー「おかあさん、遊ばないで帰るの。つまらないなあ」。

ひなニ「こんなみにくいのがいるからだよ」。

16 みにくいあひるの子が大きく写る。顔をおおってなく。なみだがこぼれ落ちる。

「それから、みにくいあひるの子は、悪くなるばかりでした。ほかのあひるにはかみつかれる。にわとりからつつかれる。おし



まいには、にいさんあひるやねえさんあひるから、『おまえなんかねこにくわれてしまえ。』と、いわれる。親あひるでさえ、『遠い所へいってくれさえすればいい。』と、いう。みにくいあひるの子はがまんができなくなって、ある日、にげ出しました」。と、説明の声。

17 みにくいあひるの子、かきのすきまから顔を出す。左右をすばやく見る。「だれも知らないようだ」。と、ひとりごとをいってはいでる。

18 しげった草むら。みにくいあひるの子、草のあいだをわけていく。小鳥が飛び立つ。「バタ、バタ」。と、いう音。あとはしんとなる。

19 大きなぬま。波が光っている。水面にうかぶかものむれ。みにくいあひるの子、あしの間にかくれる。

20 あしの葉がゆれる。ひょっこりニわのかもが顔を出す。

かも一「おい、きみ」。

かもニ「きみ、じつにみにくいね。ぼくはすっかり気に入ったよ」。

21 ぬまの上空を飛びまわっているかものむれ。てっぽうの音。かものむれが散る。

22 一わのかもがぬまの上に落ちる。波のわが広がる。

23 木の間から青いけむりがあがる。葉かげに立つりょうし。



24 ぬまの岸をかけまわるいぬ。葉先がざわざわとゆれる。

25 いぬがあひるのそばへくる。光った目、口からたれた大きなした。鼻をあひるの子につきつける。

26 いぬはあしの間をかきわけてさる。みにくいあひるの子、むねをなでて、「ああ、ありがたい。自分がみにくいものだからかみつこうともしない」。

27 みにくいあひるの子、あたりをみまわしてからにげていく。

28 たんぼ道を走るみにくいあひるの子。「ああ、わたしはいったいどこへいったらいいのだろう」。と、ひとりごと。

29 くらい空。黒い雲が流れる。

30 はげしい雨。木の葉が飛ぶ。やねにあがる雨しぶき。

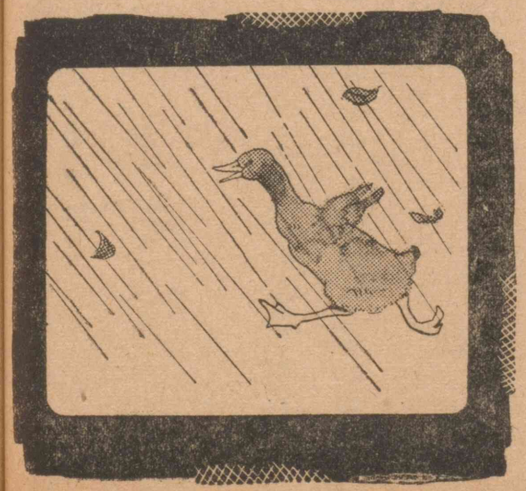
31 農夫小屋。みにくいあひるの子、雨の中を走っていく。戸のすきまから小屋の中へはいる。

32 小屋の中。夕はんをたべているおばあさん。なべからゆげがあがっている。ねことにわとりが、飛びかからんばかりの身がまえをする。

おばあさん「これはいいものがまいこんできた。うちでかってやることにしよう。」

33 農夫小屋の庭。みにくいあひるの子、じっと考えこんでいる。

ねこ「何を考えこんでいるんだ。」



にわとり「気でもくるったのかね。」

みにくいあひるの子「わたしは、もっと広い世界でくらしたいんです。」

にわとり「どこにでもかってにおいでよ。」

あひるの子、庭から野原へ出ていく。「みにくいあひるの子は、とうとう農夫小屋をぬけ出しました。」と、説明の声。

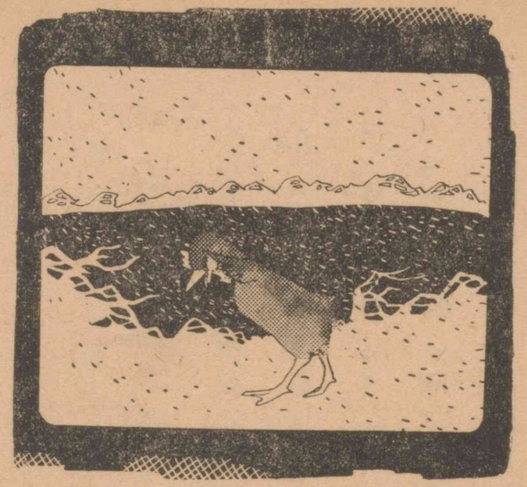
34 小川の中。子どもが泳いでいる。しぶきがあがる。子どものそばへ泳いでいくみにくいあひるの子。「みにくいやつだなあ。」「あっちへいけ。」子どもが水をかける。

35 岸にあがるみにくいあひるの子。いぬに追いかけられる。

36 「それから四か月、秋がきた。」と、説明の声。

37 西の山へしずもうとするお日さま、夕やけ雲、からすのむれ。

38 池に写る夕やけ雲。水面にうかぶ、みにくいあひるの子。池の上を白鳥がすれすれに飛ぶ。「あんなにきれいになりたいなあ」。と、ひとりごと。



39 「寒い冬がきた」の文字が、一字ずつ、つぎつぎに出る。

40 池の岸。はげしいふぶき。えだを地につけんばかりにまがる木。

41 池の岸をとぼとぼ歩く、みにくいあひるの子。「ああ、寒い。こごえ死にそうだ」。

42 雪をかぶったまつのえだの下でうずくまるみにくいあひるの子。まつのえだから雪が落ちる。



43 「やがて、春がきた」と説明の声。

44 白い雲の流れ、あたたかい日ざし。

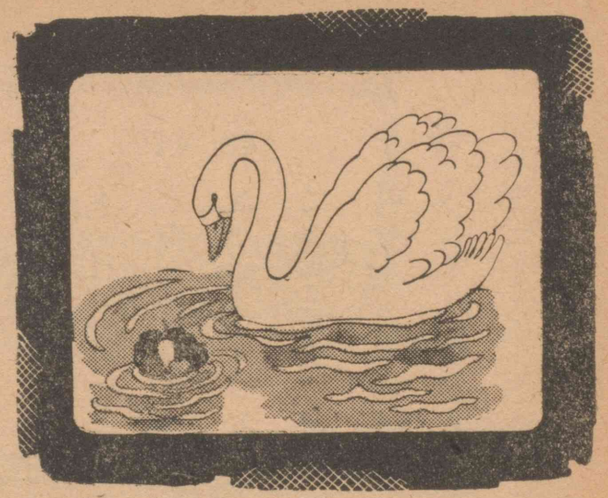
45 池の中、きらきら水面が光る。うき草が波にゆれる。

46 池の岸。赤いつばきがさいている。すいすい泳ぐめだか。つばきの花が落ちる。えだがゆれる。

47 水面に落ちたつばき。波のわがひろがっていく。

48 池の岸に立つみにくいあひるの子、大きくはねを動かす。「おや、こんなによくはねが動く。なんだか空へうきそうだ」。と、ひとりごと。

49 みにくいあひるの子、水の中へ飛びこむ。とたんに白鳥のすがたになる。水面をつばきの方へすべっていく。波のわが、日に



光る。みにくいあひるの子、つばきの花を取ろうとして下を向く。

50 白鳥の大写し、水に写ったかげ。「あ、わたしがこんなにきれい。へんだ、へんだ。」と、ひとりごと。

51 岸を走ってくる女の子、二人。頭の毛が大きくゆれる。かげが水の上を飛ぶ。「白鳥だ。白鳥だ」。の声。

52 岸の方へ走っていく白鳥。子どもがパンを投げる。おかしを投げる。「みにくいあひるの子はきれいな白鳥になって、それからは楽しくくらしました」。と、説明の声。



## 二　はいくの話

えいがが終ってから、はいくの話がありました。

はいくは今から約三百年ほど前、わが国に生まれたもので、世界で一ばん短い詩だといわれています。

やせがえる負けるな一茶これにあり

これは、小林一茶（いっさ）という人が作ったはいくです。

ある日、一茶が野道を歩いていると、

やせこけたかえると、太っていかにも強そうなかえるが、けんかをしていました。組みついてははなれ、はなれては組みつき、二ひきのかえるはいっしょうけんめいです。けれども、みるからにやせがえるの方が負けそうです。足をとめてじっと見ていた一茶は、やせがえるが気の毒でたまりません。む中になって「負けるな。しっかりしろ。やせがえる、おれがついているぞ」と、やせがえるの味方になって、力をつけずにはいられなかったのです。その時の気持をあらわしたのが、このはいくです。

はいくは、このように自然のいろいろなものを見て動いた、わたくしたちの気持をうたったもので、

ヤセガエル　マケルナイッサ　コレニアリ



のように、十七音からできている詩です。時には字あまりといって、

すずめの子そこのけそこのけおうまがとおる

のように、十七音より多いこともあれば、字たらずといって、十七音より少ないこともあります。けれども、五七五の調子をとって、十七音からできているのがふつうです。それは、わたくしたちの気持を、日本のことばで表わそうとする時に、五七五の調子が一ばんおちつきがあるためです。

はいくは、作文と同じことです。

「今まで、空一ぱいにひろがっていた夕やけ雲が、つぎつぎに消えて、むこうの山々が、だんだんうすむらさき色にぼかされていく。すると、山と山との間から、はきだされたけむりのような夕ぎりが、森を

つつみ家々をつつんで、静かにこちらへせまってくる。あたりは、ひっそりと静まりかえって、木の葉の一つも動かない。じっとあたりのけしきをながめていると、ふと目の前に黒いものが、すうっと飛んできてとまった。からすだ。からすがかれえだにとまったのだ。かれえだは少しゆれたが、またもとのように静かになった。秋の日はだんだんくれていく。」

これは、秋の夕ぐれのけしきを書いた作文ですが、短くまとめて、

かれえだにからすのとまりけり秋のくれ



とすると、りっぱなはいくになります。

はいくには、いろいろこまかいきまりもありますが、なんといっても、いいはいくをたくさん読むこと、たくさん作ってみること、この二つが、はいくを習う一ばんいい道です。

○

島々にひをともしけり春の海

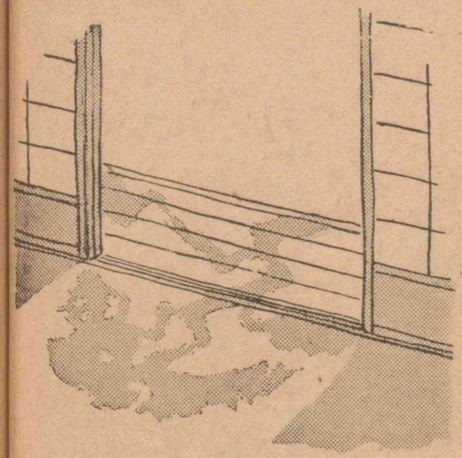
春の海ひねもすのたりのたりかな

もらいくる茶わんの中の金魚かな

こめあらう前をほたるの二つ三つ

ぎょうずいのすてどころなし虫の声

秋晴れやほりにうつったまつのえだ



名月やたたみの上にまつのかげ

すみわたる秋空高くもずがなく

かしのみの落ちてかけよるとり三ば

冬空やとり残したるかき一つ

いぬの子が落葉の中でじゃれている

ざわざわとささがすれあう冬がわら

長々と川一すじや雪の原

うめ一りん一りんほどのあたたかさ

## (二) 漢字と新しいかなづかい

### 一 漢字

わたくしたちが、「冬は寒い」ということを、書き表わすときには、「冬」「は」「寒」「い」の四文字を使って書いている。

しかし、いつでも、まただれでも、このように書くと決まっているのではない。

その時によって、あるいはその人によって、「ふゆはさむい」と書くこともあろうし、「フユハサムイ」と書くこともあろう。

このように、同じことばを書き表わすのに、われわれには、三



通りの文字があるわけである。

はじめのは、漢字まじりの書き方といい、つぎの二つはかな書きといっている。したがって、「冬」「寒」が漢字といわれるものであり、「ふ」「ゆ」「は」「さ」「む」「い」「フ」「ユ」「ハ」「サ」「ム」「イ」は、かなといわれるものであることは、だれもが知っていることである。

わが国では、むかし、ことばを書き表わすのに、漢字ばかりを使っていた時代があった。

だから、そのころは文字といえば、漢字のことであった。

それが多くの人の苦心によって、ひらがなが作られ、かたかなが考えられて、いまのように三通りの書き表わし方をするようになってきた。

漢字は、もと中国にできた文字であるが、それが二千年以上も前に、わが国に伝えられたものであるといわれている。

このような漢字は、いったいだれが、どんなふうにして作ったものであるかということは、なかなかおもしろい問題であるけれども、まだ、はっきりしたことはわかっていない。

むかし、中国にそうけつという人があって、すな地についているとりや、けだものの足あとを見て、思いついて漢字を作ったという話もあるが、なにしろ五千年も前のことであるから、たしかなことはなんともいうことができない。

しかし、漢字が遠いむかしに考えられ、はじめは物の形や、ことがらを表わしたものから、できたものであることは、いろいろな研



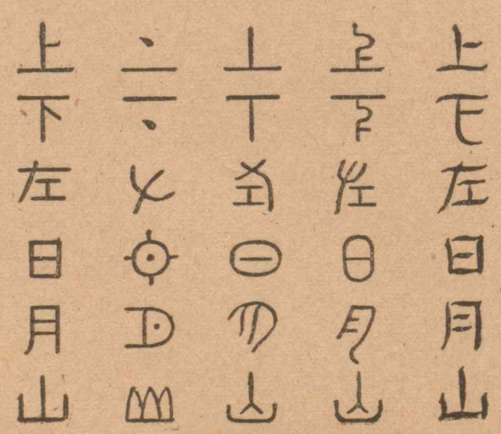
究から、明らかになっている。

漢字には読み方が二通りあることは、だれでも気のついていることであろう。

たとえば、「心」という字は、「ココロ」とも読めば「シン」と読むこともできる。

「ココロ」という読み方のほうを訓といい、「シン」という読み方を音といっている。

訓というのは、漢字をわが国のことばに読みかえたものであり、音は、漢字がわが国に入ってきた時に、そのころの中国のことばの読み方をしたものである。



「春・夏・秋・冬」を「ハル・ナツ・アキ・フユ」と読めば訓であり、「シュン・カ・シュウ・トウ」と読めば音である。

漢字の読み方は、ふつうには二通りであるけれども、中には、一字で、訓が二通り以上、音が二通り以上あるのもある。

だからこんな漢字は一字で、いく通りもの読み方があるわけである。いったい、漢字の数はどのくらいあるかというと、これもはっきりしたことはわからないが、五万以上だといわれている。

もし、こんなにたくさんある漢字を、やたらに使うとしたらどうなるであろうか。

わたくしたちは、漢字をおぼえることばかりを、仕事にしていなければならないことになろう。



文字を使って、文化を進めていかなければならないわれわれが、文字をおぼえることばかりに、苦心していたのでは、文化を進めることが、できないことは明らかである。

ところで、みなさんがよく知っているように、かなは漢字に比べて、ひじょうに数が少ない。

この少ないかなで、わたくしたちのふつうのことばは、だいたい書き表わすことができる。

それで、いまではできるだけ漢字を少なくして、かなを使うようになってきている。それかといって、漢字を全部なくしてしまうのには、いろいろこまることもあるので、小学校、中学校でおぼえる必要のある漢字、八百八十一字が決められている。

## 二　読めないかなづかい

国語の時間です。めいめい自分で調べてきたことを、話し合うことになりました。

いろいろなおもしろい発表があって、たかしくんが、

「先生、ぼくはきのう近所のおじさんのところで、おもしろい研究をしてきました。」

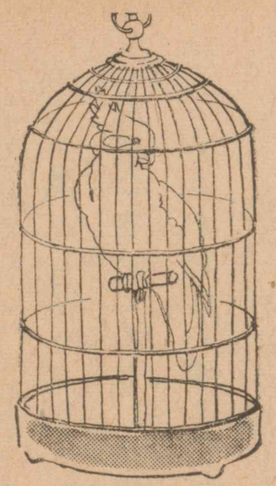
と、いいました。すると先生は、

「ほう、どんなことだね。発表してごらん。」

と、にこにこしながらおっしゃいました。

たかしくんは、ノートを持って出ていき、黒板に、





「かはいいをんなの子は、あうむをあひてにあふぎであふいでゐる。」

こんなことを書いて、

「さあ、みなさん。なんのことを書いているのだかわかりますか。」

と、いいました。

みんなは、ひとつひとつ読んでみましたが、なんのことだか意味がわかりません。

みんなが、つまらなさそうな顔をしていると、たかしくんはまた、

「かわいいおんなの子は、おうむをあいて

におうぎであおいでいる」。

と、黒板に書いて、

「前に書いたのと、今書いたのは、同じことなのです。はじめに書いたのは古い書き方で、あとで書いたのは今の書き方です」。

と、話して発表を終りました。

すると、先生がお立ちになって、

「たかしくんは、なかなかいい研究をしてきました。たかしくんの発表でよくわかったと思いますが、先生が古い書き方と新しい書き方について、少しお話をしましょう」。

といって、つぎのような話をなさいました。

○



みなさんも、本やざっしなどを、気をつけて読んでごらんなさい。きっと、たかしくんのようなことに、気づくにちがいありません。

「てふてふ」「ざふきん」「とほい」「いへ」

先生も、たかしくんのいった古い書き方で書いてみました。これを、今の書き方で書くと、

「ちょうちょう」「ぞうきん」「とおい」「いえ」

と、なるのです。

このように、ことばをかなで書き表わすきまりを、「かなづかい」と、いいます。

だから、前のような書き方は古いかなづかい、あとのような書き方は、新しいかなづかいというわけです。

今までの古いものは、みんな古いかなづかいで書いていました。しかし、読む時には、新しいかなづかいのように読むのです。

は——ワ　を——オ　あう——オウ　ひ——イ

あふ——オウ　あふ——アオ　み——イ

上のように書いてあっても、下のように読んだのです。

どうして、そんな書き方をしたのかというと、ずっとむかし、これらのことばの書き表わし方を決めたころは、「は」を「ハ」と読み、「あふ」を、「アフ」と読んでいたのです。

むかしは、「あさがお」を「アサガホ」といったから、「あさがほ」と書き、「かえる」を「カヘル」といったから、「かへる」と書いたのです。

それが長い間に、「は」は「わ」に、「あう」は「おう」に、「あさがほ」は



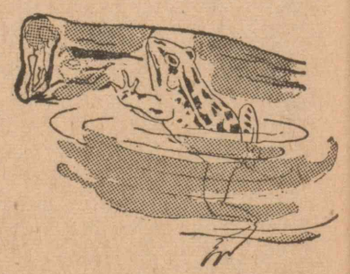
「あさがお」に、「かへる」は「かえる」に、いい方がかわってきたのです。

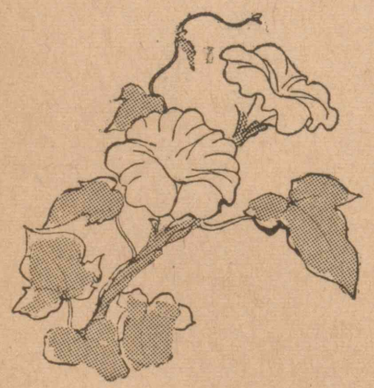
いい方がかわってきたのに、書き表わし方がもとのままになっているのは、おかしいわけです。

それで、今では、かなづかいをいい方の通りにしたわけです。

いいかえると、かなづかいは発音どおりということになります。

さあ、これでたかしくんの研究した、古いかなづかいと、新しいかなづかいのこと





が、少しはわかったでしょう。

先生が、ここまでお話しになった時に、いさむくんが、

「ちょっと、わからないことがあります。国語の本に、

わたくしは学校へいきます。

本を読みましょう。

と、書いてありますが、あれは

わたくしわ学校えいきます。

本お読みましょう。

と、読むのではないのですか。先生は発音どおりに書くといわれましたが、そうすると国語の本がまちがっているのですか」



と、たずねました。先生は、

「いさむくんは、大へんいいことに気がつきました。いさむくんがふしぎに思うのはあたりまえです。それは、こういうわけなのです。

これをください。

花はきれいだ。

どこへいくの。

右に書いたように、ことばとことばの間にある、『を』『は』『へ』は、発音は『お』『わ』『え』ですが、書くときは、『を』『は』『へ』と書くことに、特別に決めているのです。

それから、『……という』の『いう』は、発音は『ゆう』ですが、

『いう』と書くことになっています。

このほかにも、特別なきまりがありますが、みなさんで、いろいろ研究してみなさい。きっとたくさん新しい問題が出てくるでしょう」。

と、おっしゃいました。

○

漢字や、かなづかいのことは、これからはっきり研究しなければならないことが、たくさんあります。

この問題については、なん年も前から、たくさんの人が、血の出るような苦心をして研究してきました。

しかし、まだ研究しきれないことが、たくさんあります。



このほかに、かなのことを研究するのもだいじです。ローマ字の研究も、いよいよだいじです。

それからまた、どのようなことばが正しいのであるか、というようなことを研究することは、さらに大切なことでしょう。

このような国語のいろいろな問題は、いったいだれが研究するのでしょうか。もちろん、学者が自分の仕事としてやっていくでしょう。しかし、なにより力になるのは、あなたがたのひとりひとりが、自分のことばを愛し、自分の文字を深く考えることなのです。

そうしたときに、わが国のことばは、もっと正しく、もっと美しいものとなることでしょう。

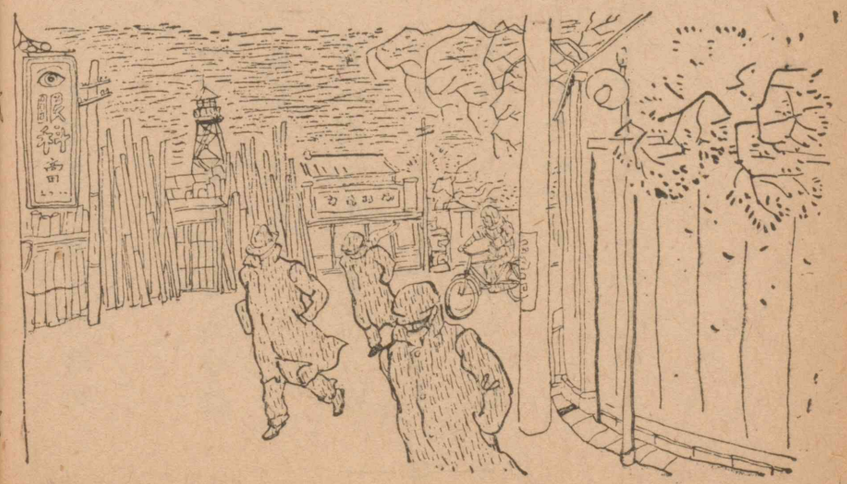
## （三）冬の生活

### 一　冬の夕ぐれ

寒い北風が、電柱やこえだをならしてふきとおります。

工場から、会社から、仕事をすませて帰る人が、オーバーのえりをたてて、いそがしそうに歩いていきます。

かわいた道に、くつの音やげたの音がひびき、そのあいだを、自転車がベルの



音をたてて走っていきます。

やがて、その音がたえて、また北風の音だけがきこえるころ、くれやすい冬の日は落ちて、あたりがうすぐらくなってきます。

どの家にも、あかりがつきました。ガラガラガラと戸をしめる音がきこえてきます。

冬の夜がおとずれたのです。

まだ、いくらかうすあかく見える空に、星がつめたくまたたいています。

そのころ、まさおくんの家では、みんな茶のまに集まって、夕はんのさいちゅうでした。でんとうがへやを明かるくてらし、テーブルの上のごはんから、おしるから、ほかほかとゆげがあがり、外

のつめたさに比べて、あたたかさがあふれています。たえまなく起こるわらい声は、茶のまをいっそう明かるくしています。

おかあさんが、

「こんばんは、ずいぶんひえますね」。

とおっしゃると、おとうさんは、

「新聞にも寒くなると書いてあったよ。北の方は雪だろう」。

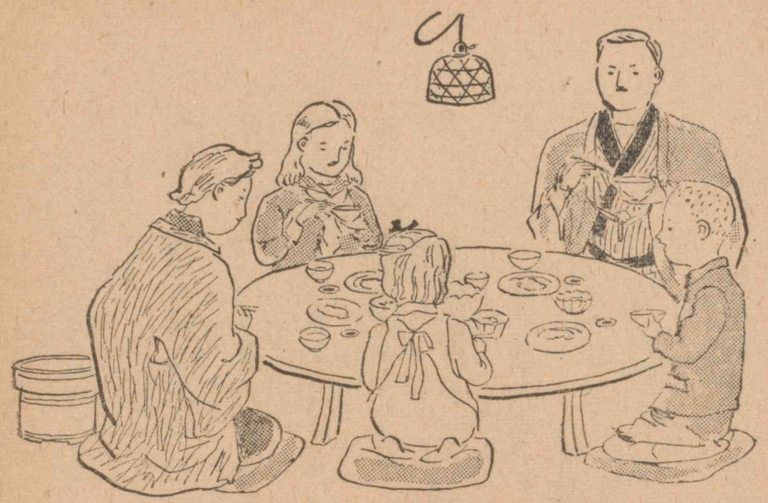
と、おっしゃいました。

「雪がふるといいなあ。おじさんの方はスキーができるでしょう。ことしも、おじさんのうちにいきたいな」。

と、まさおくんがいうと、

「冬休みには、おじさんのうちにいくかね」。





と、おとうさんはにこにこしながらおっしゃいました。

「おとうさん、きょう、駅には、スキーの道具を持った人がいたよ」。

まさおくんは、スキーにいく人の勇ましいすがたを思いだしたのでした。

楽しそうな話し声が、たえまなくきこえているころ、冬の夜はすっかりくれて、戸をたたく北風の音が、寒そうにきこえていました。

## 二　炭やき

村里を遠くはなれた山の中です。

葉のすっかり落ちたぞうき林が続いています。ところどころに、大きなまつの木も見えます。

鳥のなく声がきこえてきます。

鳥のなく声のほかに、なんの音もしない、静かな山の中です。

林の中から、ゆるやかにけむりがたちのぼって、冬の空に消えていきます。

○

これは、炭をやくかまです。風や雨にさらされたそまつな小屋の

下に、まんじゅうの形をした、大きなかまが見えます。

一方にたき口があります。たき口から、どんどん火がもえて、白いけむりがむくむくと出ています。

ひとりの人が、たばこをすいながら、そばにこしをかけています。一メートルぐらいに切りそろえられた木が、つみあげてあるのも見えます。

○

メリ、メリ、メリ。

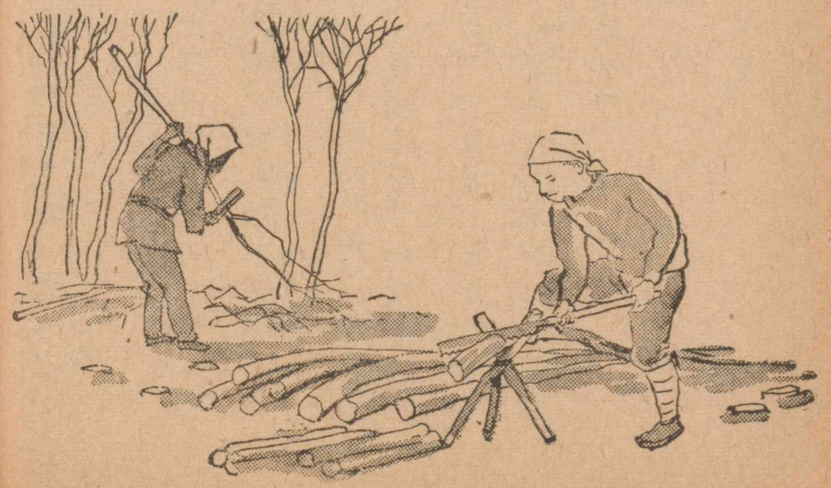
大きな木が切りたおされました。もう、たおされている木も見えます。まさかりをつえにした人が、たおれる木をじっと見ています。たおされた木のえだを、かまで、はらっている人もいます。のこぎりで、一メートルぐらいにひいている人も見えます。

静かなぞうき林に、力強いこだまがひびきます。

○

炭がまの口から、木をつめています。

炭がまの中にはいってつめる人、そばから



ら渡している人、仕事はどんどん進んでいきます。

木がぎっしりとつめられると、ねった土で、かまの口がとじられました。

たき口に火がいれられました。さかんにもえています。白いけむりがむくむくと出て、炭がまをつつみます。ひとりの人がたき口にこしをおろして、どんどんもやしつづけています。

○

えんとつからは、むくむくとけむりが出ています。

ひとりの人が、ねった土でたき口をとじています。小さなあなを残して、ぬりつぶしていきました。

炭がまの中はどんなになっているのでしょう。

○

けむりがうすれて、ほそぼそとたちのぼっています。

たき口やえんとつが、すっかりとじこめられました。ようすを見ていた人は、炭がまのまわりをまわって、やがて、どこかへいってしまいました。

どんどんもえていた炭がまは、いまは、しずまりかえりました。

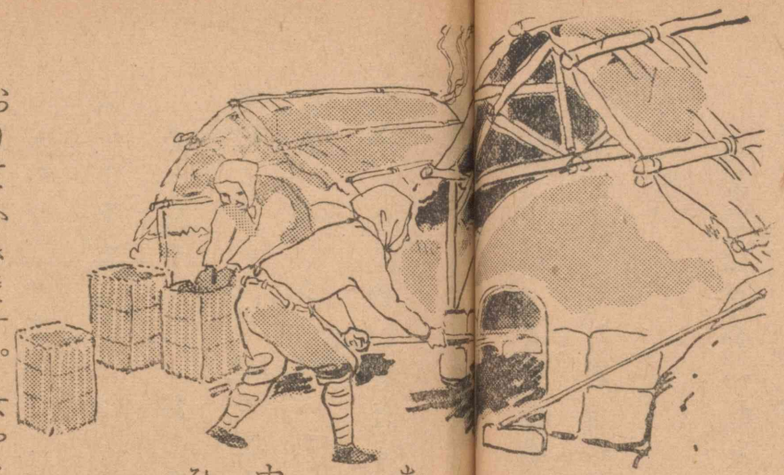
近くで木を切りたおす音が、きこえます。

○

黒くやかれた炭がとりだされています。とりだした炭を、すぐ、俵につめています。

炭で、まっ黒になって働く人々の顔には、





あせが光っています。

とり残され、とりわすれられたような山の中で、炭がまと取り組む人々の顔には、ただ、ひとすじに働く喜びがあふれているようです。

○

炭をせおった人が、しもどけの急な山道をおりていきます。女や子どもも続いています。

炭は山から村へ運ばれ、集荷場に山のようにつまれます。

やがて、荷車で、トラックで、汽車で運ばれていきます。

炭は、どこへ運ばれていくのでしょう。

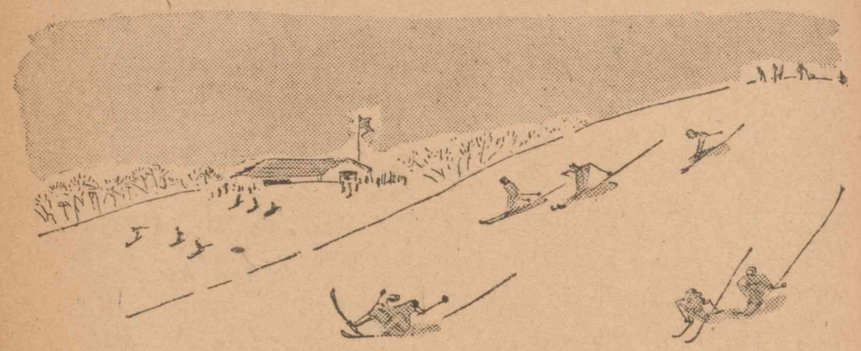
## 三　スキーにいった

ゆうべおそく、おじさんの家に着いたまさおくんは、もう、目をさました。

きのうふっていたこな雪は、けさはすっかりやんで、風もなく、スキーをするのには、ちょうどよかった。

まさおくんは、おじさんといっしょにスキーをかついで家を出た。しばらくいって道をおれ、谷あいを登っていった。スキーのあとが、もう、いくつもついている。小さなまつ林の間を過ぎていくと、にぎやかな人声が聞える。





いよいよ村のスキー場に着いた。子どもたちが楽しそうにすべっている。まっ白なけいしゃを上へ下へ、黒いすがたが動いていく。

「さあ、着いたよ。まさおさん、すべってごらん」。

と、おじさんにいわれて、まさおくんはゆるやかなけいしゃをすべってみた。去年のことを思うと、ことしは少しはすべれるようだ。おじさんに正しいすべり方を教えてもらいながら、なんべんも練習をした。

村の子どもたちは、スキーを思うようにあやつって、さまざまなけいしゃを自由にすべって

いる。中には、「く」の字のようにすべっていくもの、スケートのようにかた方ずつですべっていくもの、ジャンプをしているもの、いろいろである。ときどき、まさおくんは立ちどまって、うらやましそうにみとれていた。

おじさんは、

「わたしがすべってみるよ」。

といって、急なけいしゃを、すべりはじめられた。前かがみになって、つえをうしろにあげ、子どもたちの間をじょうずにすべっていかれる。スキーのあとがきれいについていく。パッととびあがられたかと思うと、横向きになってとまっていられた。上を向いてつえをあげられたので、まさおくんも、思わずつえをあげた。

今度は、そのけいしゃをいっしょにすべることにした。おじさんは制動をかけながら、ついて来てくださった。すべるすべる。早くすべる。あっというまに、まさおくんはころんでしまった。起きあがって、またすべりはじめた。やっと下に着いたまさおくんは、上の方を見あげた。銀色に光ったけいしゃが、ずいぶん高く見えるのにおどろいた。

その時、上から、村の子どもたちがすべって来た。

にこにこしながら、ゆかいそうにすべって来る。

つぎからつぎへとすべって来ては、制動をかけてとまる。そのたびに雪が散って、子どもたちのからだにかかる。楽しそうなわらい声が、スキー場にひびいていった。

それから、まさおくんは、おじさんとけいしゃを登っていった。

「あそこをごらん」。といわれて、まさおくんが見ると、高い高い山の上から、ひとり、またひとり、きれいにならんで、まつ林の間をぬってすべって来る人たちがいる。まがるたびに雪けむりがあがる。みるみるうちにすべりおりて、まさおくんの前を、ものすごい早さですべっていった。

「すごい。勇ましいなあ」。まさおくんは、思わず手にあせをにぎった。村の子どもたちも、すべるのをやめてじっと見ていた。



おじさんは、

「どうだ、すごいだろう。あの人たちは、国民体育大会には、いつも出場しているんだよ」。

と、いわれた。

まさおくんは、

「あんなにすべれたら、どんなにゆかいだろう」。

と思った。しばらくすべって帰ることにした。帰るころ、からだはほかほかとあたたかくなっていた。

## 四　冬ごもり

三学期がはじまってからの、ある日のことです。雲がきれて、ところどころ青空も見える日でした。

まさおくんは、友だちといっしょに校門を出ました。

ちょうど、ゆうびん局の所へ来た時、ふいに、たかしくんが、

「あれ、なんだろう」。

と、大声をだして、高い所を指さしました。みんなは立ちどまりました。たかしくんは、ゆうびん局の横にある、かなり大きな、さくらの木のえだをさしているのです。

すっかり葉が落ちて、えだばかりになっているさくらの木は、空



に向かって手を広げたように、立っています。その中ほどの所に、かれ葉のような細長いものがぶらさがって、風にゆれています。明かるい空に黒くうきだしたように見えます。

「なんでしょうね」。

ゆきこさんもいいました。

「葉にしてはおかしいし——」。

まさおくんも、なんだかわかりません。

「取ってみようか」。

と、たかしくんがいいました。

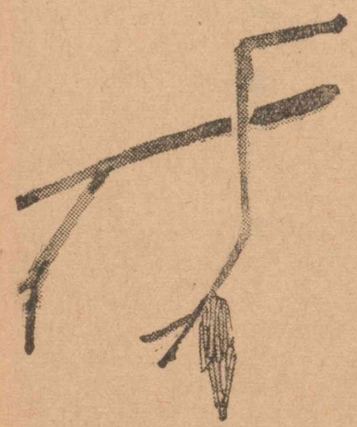
「そうだな。でも、よせよ。学校からの帰り道だし、木に登るのはあぶないから」。
と、まさおくんがいうと、
「でも、調べてみたいなあ」。
と、たかしくんは心残りのようです。しばらく、みんなはだまったまま、風にゆれるのを見あげていましたが、
「帰りましょう」。
という、ゆきこさんのことばにさそわれて、また、かたをならべて歩きだしました。
家に帰ったまさおくんは、さっそく、おかあさんにその話をしました。おかあさんは、



「まさおさん、来てごらん」。
とおっしゃって、うらの庭に出ていかれました。まさおくんはついていきました。
うら庭のさくらもかえでも、すっかり葉が落ちて、寒そうに見えます。おかあさんは、
「まさおさん、あんなものではなかったの」。
と、かえでのえだにぶらさがっている、かれ葉のようなものを指さされました。
「おかあさん、あれだよ。きょう、ぼくたちが見たのは」。
と、まさおくんがいうと、
「それでは、みの虫ですよ」。と、おっしゃいました。

よく見ると、今まで気のつかなかったのがふしぎなくらいです。大きいのや小さいのや、長いこえだをつえのようにさげたのや、かれ葉をつけたのや、いろいろなかっこうをしたのが、ぶらさがっています。まさおくんは取ってみようと思って、ほうきではらいましたが、なかなか落ちません。そこで、ものほしざおを持ってきて、えだをきずつけないように注意しながら、たたき落としました。やっとのことで、一つだけ落としました。

落ちたみの虫を手にとって見ると、わりに大きく、かれえだをならべたふくろでした。見ていても、少しも動きません。おもしろいものだと思





って、手の上でころころさせているところへ、ねえさんが帰ってきました。

「ねえさん、これ、みの虫なの。」

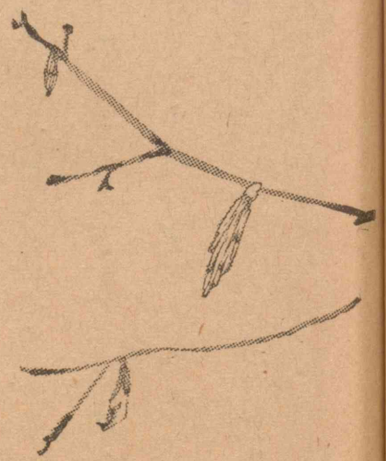
ときくと、

「みの虫ですよ。冬ごもりをしているのです。」とおっしゃいました。

「冬ごもりって、なあに。」と、またきくと、

「冬は寒いから、生きものはみんな、自分の家の中にじっとしているのよ。これ、みの虫の家よ。この中に虫がじっとしているんですよ。」

と、教えてくださいました。



そういえば、春から秋にかけて、とんだりはねたりしていた、たくさんの虫やかえるは、どこへいったのか、少しも見ることができません。

まさおくんは、ふくろを切りひらいて、中の虫を見たいと思いました。はさみを借りて、ふくろの両はしから少しずつ、虫をきずつけないように注意しながら切っていきました。ふくろは、なかなか強いので、たびたび切りそこなってうわすべりをしました。やっとりだした虫は、かなり大きなものでした。むらさきがかった黒色をして、はちきれそうにふとっています。ふくろの中のくらいところから急に明かるい所へ出たので、おどろいたのか、足を少し動かしましたが、また、じっとしてしまいました。



まさおくんは、じっと見ていましたが、

「おもしろいかっこうで、冬ごもりをするんだね」。

と、いいました。ねえさんは、

「虫だけではないのよ。あのさくらの木をごらん。まるでかれているように見えるでしょう。でも春になると、きっと花をひらき、わか葉もだすのよ。あの少しふくらんでいる所に、新しい花や葉がはいっているのですよ」。

と、教えてくださいました。

みると、葉の落ちたあとのすぐ上に、ひとつずつ芽がついています。いつのまにこんな用意をしたのか、ふしぎに思われました。

「おもしろいなあ。みんな、いろいろちがった仕方で冬ごもりをす

るんだなあ」と、まさおくんがいうと、
「人間にも冬ごもりがあるかしら」。
と、ねえさんは、わらいながらおっしゃいました。
まさおくんは、いろいろな虫や草木の冬ごもりのようすを、調べてみることにしました。

## (四) まさおくんの病気

### 一 まさおくんの病気

まさおくんはねむりからさめました。
静かな朝です。まくらもとのひばちにかけた、やかんのお湯が、「シュン。シュン」と音をたてています。しめきってあるしょうじに明かるい冬の日がさして、のきばで鳴いているすずめの声が、気持よく聞えます。
まさおくんは、ひとつ大きく息をしました。
その時、ふすまがすうっとあいて、おかあさんがにこにこしな

がらはいってこられました。

「まあ、よくねむったこと。気分はどう」。

おかあさんのあたたかいことばに、まさおくんはこっこりうなずきました。

三日ほど前のことです。学校から帰って来たまさおくんは、いつものような元気がありません。おかあさんは、まさおくんの顔を見るなり、

「まあ、どうしたの。顔色がわるいわ」。

といいながら、ひたいに手をあててみられました。

「あ、熱もありますよ」。

とあわてて、ふとんをしいてくださいました。



まもなく、おいしゃさんがおいでになって、脈をみたり、熱をはかったり、のどを見たりしていられましたが、

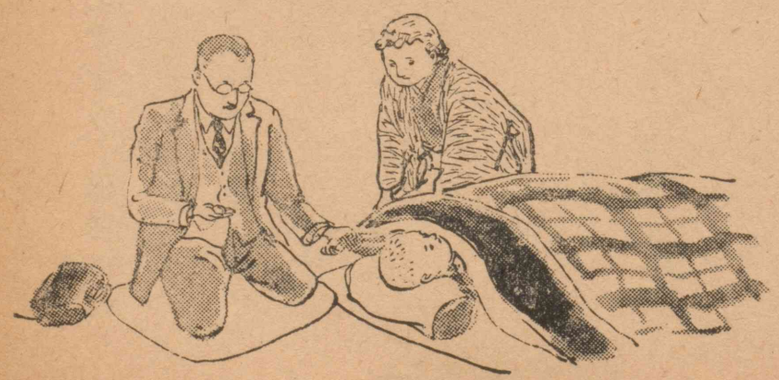
「ああ、かぜだよ。あたたかくしてねていたらよくなるよ」。と、おっしゃいました。

それから、学校を休んで、ずっとねているのです。

元気のいいまさおくんにとっては、それがどんなに苦しく、また悲しかったことでしょう。

友だちと遊んだり、お話したりすることのできないことは、一日でもさびしいものです。

それに、まさおくんは、もう三日も、ねたま



まです。朝、家の前を、友だちがにぎやかに話しながら、学校へいってしまったあと、静かになると、学校のこと、先生のことなどがつぎつぎと思われます。今ごろ、みんなは何をしているだろうかと思うと、たまらなくなって、すぐにでも起きあがりたくなります。

けれども、おいしゃさんのいいつけを守らなければ、よくならないといわれて、じっとがまんをしてねているのです。

さいわいに、熱がだんだんさがり、けさは、ずっと気分がよくなって目のさめたまさおくんは、すずめの鳴く声をきいていました。

「まもなく、おいしゃさんがおいでになりますよ。早く起きられるようになるといいね」。

と、おかあさんがおっしゃっているところへ、おいしゃさんがおい



でになりました。

「ほう、これはよくなったぞ」。

へやにはいってこられたおいしゃさんは、まさおくんの顔色を見るなり、こうおっしゃいました。

しばらくからだをみておられましたが、

「あすから学校へいってもいいよ」。とおっしゃいました。

まさおくんは、うれしくてたまりません。

「今度からは、かぜをひかないように気をつけなさいよ。どうしてかぜをひいたのか、おじさんがあててみようかね」。

と、おいしゃさんは、にこにこしながらおっしゃいました。

## 二　おいしゃさんの話

「まさおくんがどうしてかぜをひいたかというと」。ここまでおっしゃったおいしゃさんは、お話をやめて、

「フットボールに熱中して、あせをかいたのを、そのままにしていたのだろう。ね、そうだろう」。

と、まさおくんの顔をのぞきこむようになさいました。

まさおくんは、フットボールがとくいで、いつもセンターになって働いているのです。そういわれてみると、頭のいたくなった日も、フットボールに熱中して、あせをかいたままにしていたことを、思いだしました。



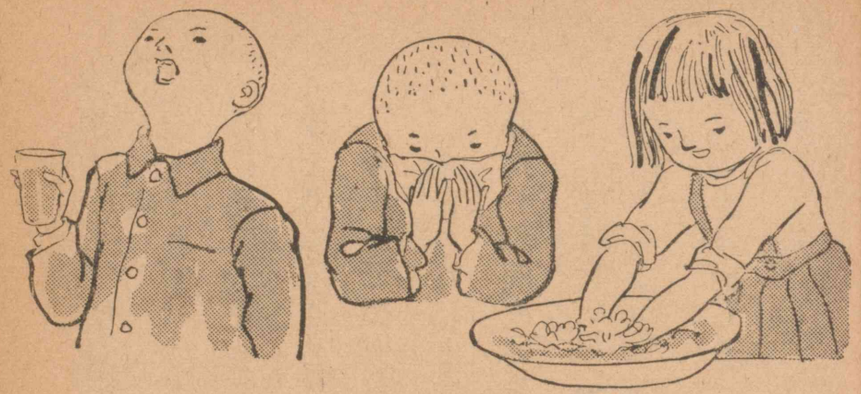
おいしゃさんは、さらに話をお続けになりました。

あせをかいてそのままにしておくと、あせがじょうはつする時、からだの熱をとるので、急に寒くなってかぜをひくのです。体温は人によってちがうけれども、ふつう三十六七度です。暑い夏でも、寒い冬でも、この体温がたもたれるように、人々は着るもので自然に調節しています。それが、急にあたたかくなったり、急に寒くなったりして、からだの調節がとれなくなった時に、よくかぜをひくのです。夜、ふとんの中であたたまったからだが、急に外のつめたい空気にふれる時などもそうです。ふとんから出る時には、かならず何かを上に着ることや、運動のあとは、かならずあせをふいてお

くことなどは、だれにでもできる大切な心がけです。また、きたない下着をつけて平気でいる人がいますが、下着は、いつもきれいにあらったもの、あせをよくすいとるものを着ることです。多くの人は上着だけをきれいにかざる、悪いくせがあります。上着よりも下着をきれいにしなければならないのです。

それから、もうひとつ大切なことは、鼻の働きを考えて、鼻を大事にすることです。鼻のない顔はおかしいでしょう。けれど、おかしいからといって、かざりものにあるのではありません。口からのどまでと、鼻からのどまでと、どちらのきょりが長いでしょう。つめたい空気が鼻からすいこまれると、のどへいく長い道を通る間にあたためられるので、口からつめたい空気をすいこむよりもかぜを





ひきにくいのです。その上、鼻のうちがわには毛がはえていて、空気中のきたないごみがからだの中にはいらないように防いでくれます。

鼻は、たいへんつごうよくできています。いつもはなをとっておいて、息は鼻でするようにしなければなりません。鼻の悪い人はかぜをひきやすいといわれるのは、そのためです。

ところが、かぜといっても、流行性のものがあります。これは病原体があって、だんだん他人にうつっていくのです。この病気にかかると、自分だけでなく、他人にめいわくをかけます。

自分だけでなく、他人にめいわくをかけないためにも、手や足をいつもきれいにすることや、うがいをすることをわすれてはいけません。ぜひ、守ってもらいたいことは、ごはんをたべる前にかならず手をあらうことです。

もうひとつ、いっておきましょう。

「まかぬたねははえぬ」。と、むかしからいわれていますが、病気は、なにかの病原体がもとになっているのですから、その病原体に負けないように、へいぜい、体をじょうぶにしておくことが一ばん大切です。

こうおっしゃって、おいしゃさんは、かばんを持って立ちあがられました。



## 三　かぜのなおるころ

でる人　まさお。まさおの姉。まさおの妹。いさむ。たかし。けん一。みちお。

ところ　まさおの家の一間

静かな音楽が流れる。しばらくして、コツコツという音がきこえる。まさおがねている所へ、姉が近づくのである。

姉　「まさおさん、気分はどう。水まくらをかえましょう。きょうは、少しお熱がさがったようね」。

まさお　「うん、きのうよりずっと、よくなったような気がするよ」。

姉　「そう。よかったわね。ひどくならないで。この分だと、あし

たは、すっかりお熱がとれるかも知れないわね」。

まさお「そうしたらぼく、あさってから学校へいけるかな」。

姉「そうねえ、あさってはいけないかも知れないけれど、こうしてじっとねていれば、すぐに学校にいけるようになるわよ。がまんしていなさいね」。

まさお「うん。でもたいくつだなあ」。

姉「じゃ、ねえさんが歌をうたってあげるわ」。

姉は静かにうたいだす。歌が終るころ妹の声がする。

妹「おねえさん、お客さまよ」。

姉「ああそう。どなたかしら」。

妹「おにいさんのお友だちよ」。



姉「どうぞ、おあがりくださいって」。

妹「あら、もうあがっているのよ」。

友だち「こんにちは」。

姉「こんにちは。いらっしゃい」。

いさむ「きょうね、学校で、みんなでまさおくんへお手紙を書いたから、持って来ました」。

姉「それはそれは。どうもありがとう。まさおさん、お友だちがおみまいに来てくださったのよ」。

たかし「どうだい、まさおくん」。

けんー「まだ、熱があるのかい」。

みちお「毎日たいくつで、しようがないだろう」。

姉　「まさおさんはね、早く学校へいきたくてたまらないらしいのよ」。

まさお「ねているの、つまらないもの」。

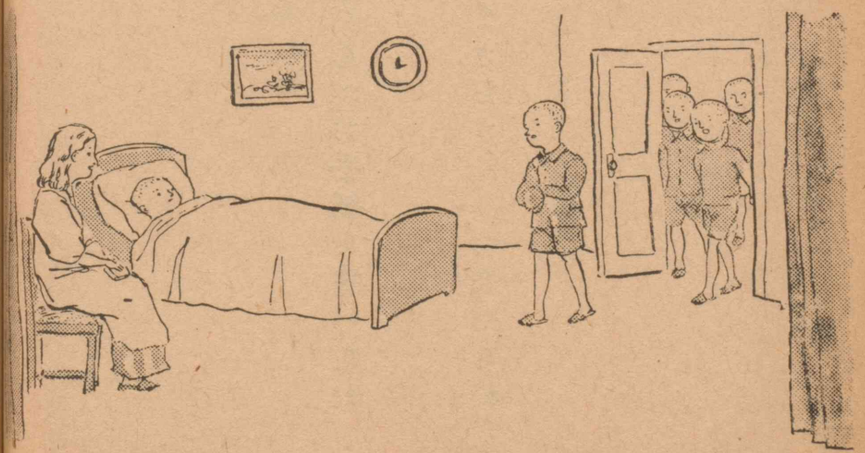
姉　「みなさんがお手紙を持って来てくださったのよ。ほうら」。

まさお「わあー。ずいぶんあるね」。

いさむ「みんな、一まいずつ書いたんだ。ぼくが読んであげようか」。

まさお「うん」。

いさむ「だれのにしようかな。うん、はじめに先生のを読むよ。『まさおくん、





ご病気いかが。おうちのみなさんのおっしゃることをよくきいて、しっかり養生してください。そして、早く元気になって、またみんなといっしょに勉強しよう。きみが病気になる前の日に出した詩は、大へんよく書けていましたよ。きょう、先生はいそがしい用事があるので、おみまいにいけませんが、なかよしの友だちがいくはずです。一日も早く元気な顔を見せてください。さようなら。』」

たかし「きみの詩、黒板の横のかべにはってあるんだよ」。

みちお「先生ね、まさおくんの病気が悪いようだったら、二三日中におみまいにいくといってらしたよ」。

まさお「そうかい。ぼく早くなおって学校へいきたいけど、先生にお

みまいに来ていただくのもいいなあ」。

けんー「両方なんて、よくばりだぞ」。

みんなは、一度にわらいだす。

いさむ「じゃ、つぎはどれを読もうか。ええと、これはすみこさんのだ。いいかい——。まさおさん、しばらくごぶさたいたしました。そのごおかわりありませんか。——なんだ、すみこさん、おとなみたいなことを書いてらあ。おかしなおみまいの手紙だなあ。——学校では、みんな元気で勉強したり、遊んだりしています。このごろ新しい歌を習いました。まさおさんがなおったら、教えてあげるわね。このあいだはいったわださんという人、とてもドッジボールが強いのよ。男の子と、女



の子と試合して負かしてあげるから、早くなおっていらっしゃい。」

けんー「へんてこな手紙だなあ、負かしてあげるからだって」。

まさお「ね、新しく習った歌ってどんなの」。

みちお「みんなでうたってあげよう」。

歌

コッコケコッコ　夜が明けた。
お空はまっかな　朝やけだ。
元気よく　さあとび起きて。
朝のあいさつ　いたしましょう。
みなさん　おはようございます。

まさお、うれしそうに手をたたく。

まさお「おもしろい歌だね」。

たかし「みんなでうたうと、とってもいいよ」。

まさお「ほかの手紙を読んでくれない」。

いさむ「うん。ええと、これにしよう。まさおくんへ、大山けん一より。なんだい、これはけん一くんのじゃないか。けん一くん、自分で読めよ」。

けん一「よし。えー、まさおくんへ、大山けん一より」。

いさむ「そこはもう、すんだよ」。

けん一（つっかえながら読む）「ご病気はどうですか。ぼくたち四年生は、きみが休んでいると、じつにさびしい。……」



けん一「まてよ、あわてるなよ。みんなで、まさおくんの病気がなおるように、首を長くして待っているよ。もんしろのさなぎをかっているんだってね。ぼくたちもいっしょうけんめい研究しているよ。早くなおっておいで、またいっしょに勉強しよう。さよなら——ああくたびれた」。

たかし「きいている方が、くたびれちゃった」。

みんな、わらう。

まさお「けん一くんの研究は葉っぱだったね」。

けん一「このごろ、すごいんだから。ずいぶんたくさん集めたよ。集めた葉っぱの名前がわかった時は、うれしいなあ」。

まさお「そりゃ、ぼくのこん虫の研究でも同じことだよ。たかしくん

の貝の研究は進んだかい」。

たかし「ぼくも病気で休んだから、今、やりなおしているんだ」。

まさお「いさむくんは、今、何をやっているの」。

いさむ「ぼくは、ことばの研究だ」。

まさお「そりゃ、おもしろそうだね。ぼくも早く学校へいって、みんなといっしょに研究したいなあ」。

けん一「だめだめ。研究は病気がなおってから」。

たかし「ねえ、みんな。あまりおそくなるといけないから、そろそろ帰ろうよ」。

いさむ「うん。まさおくん、じゃ、みんなの手紙をここにおいておくよ。あとでゆっくりごらんよ」。



けん一「じゃ、早くなおって出ておいでね」。

まさお「そうかい。もう帰るのかい。つまらないなあ……。おねえさあん」。

姉「はあい。おや、もうお帰り。ゆっくりしていらっしゃればいいのに。いま、お茶をいれているのよ」。

いさむ「でも、きょう、より道するって、おかあさんにいってこなかったから、また来ます」。

姉「そう。じゃ、またいらしてくださいね」。

まさお「先生や、みなさんによろしく」。

いさむ「さようなら。また来るからね」。

姉「みなさん、ほんとうにありがとうございました」。

みんな「さようなら、さようなら」。

また、静かな音楽が流れてくる。

まさお「ねえさん、みんないっちゃった」。

姉「ええ、今、あそこの土手のところを歩いていらっしゃるわ」。

まさお「ねえさん、ぼく早く学校にいきたいなあ」。

姉「またはじまったのね。もう少しよ、がまんしなさいね。それに家でだって、まさおさんのすきな、こん虫の研究はできますよ。ねえさんも手伝ってあげるわ。ほら、こないだから大事にかってる、もんしろはどうなったでしょう」。

まさお「よしこ、しいくびん持って来て」。

妹「はあい」。



妹「おにいさん、さなぎが動いてるようね」。

姉「ほんと、おや、ずいぶん色がかわったのね。黄色になりましたよ」。

まさお「黄色く、や、もうすぐちょうになるよ。ねえさん、とけいを見ていてください」。

姉「やれやれ、大へんなことですね。はい、承知しました」。

音楽がなりだし、だんだん強くなる。

まさお「しょっかくが出た。目だ。

はねが――」。

姉　「十分よ」。

音楽はげしくなる。もりあがるように。

姉　「もう、四十分たちましたよ」。

まさお　「静かに、静かに。――あ、飛んだ」。

妹　「まあ、きれいだわ。まっ白なもんしろちょう」。

ちょうちょうの音楽。かるく。

まさお　「そうだ。きょうのちょうちょうのたんじょうのことを、詩に作って、先生や、お友だちに見てもらおう」。

姉　「それがいいわ。じゃ、ねえさんが書いてあげますから、いってごらんなさい」。



詩

きょうもまた雨が
ガラスごしに
雨だれの音　ポトリ　ポトリ
じっときいていたら
あっ
もんしろのさなぎが
きれいなきれいな
ちょうになったよ

まさお　「ぼく、今度学校にいったら、みんなに聞かせるんだ」。

姉　「ええ、そうしなさいね」。

音楽がだんだん大きくなって、やがて静かにやんでいく。

○

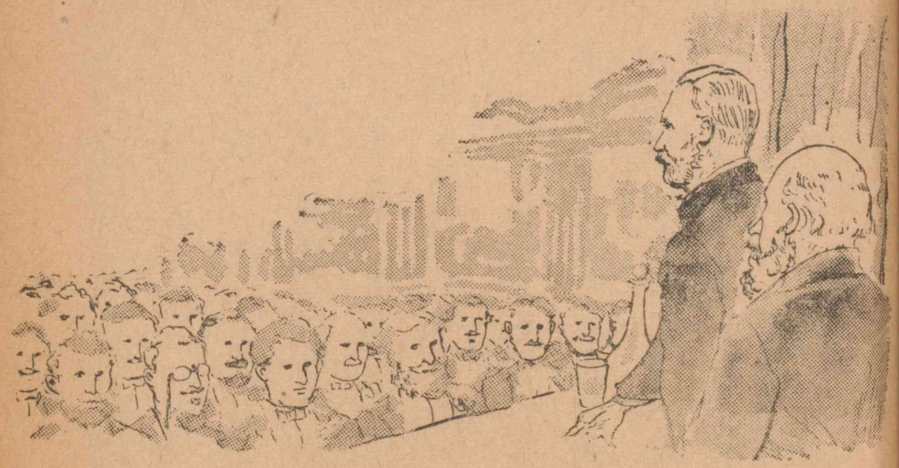
これは放送げきの台本です。

もともと、げきは見るためのものでありますが、これをラジオの放送などでするとげきのせりふ（げきをする人のいうことば）を聞くことはできますが、じっさいにやっている、すがたを見ることはできません。

だから放送げきは、ふつうの見るげきにたいして、聞くげきということができましょう。

放送げきの台本が、せりふとか音楽とかに、こまかい注意をしているのはこのためです。声とか音とかで、動作を表わす仕方を、いろいろに研究してみたいものです。





## 四　ルイ・パスツール

会場には、世界の国々からすぐれた学者たちが集まっています。もう、会場はいっぱいで、たくさんの学生たちは、外にあふれていました。

今、ルイ・パスツールの残したりっぱな仕事をたたえる会が、はじまるところです。

やがて、足の不自由なパスツールは、フランス大統領の手に助けられながら、台の上にあがりました。みんなは、一度に手をた

たいてむかえました。パスツールは、

「みなさん。人は、ときに苦しいことがあり、また悲しいこともありましょう。しかし勇気と希望をなくしてはなりません。じっけん室や図書室にはいって、平和な明かるい生活を送ってください。そうして、毎日、どれだけ人々のために役にたったか、どれだけ努力したかということを、自分に聞いてごらんなさい。心から喜ぶことのできる日がかならず来るものです」。

と、いいました。みんなは、また、手をたたいて、パスツールのりっぱな考えをほめました。

これは一八九二年、パスツールの七十回目のたんじょう日のことでした。



○

ドイツに近い小さな町に、まずしいかわやがありました。その家の人は、大へん心がけのいい人で、「正直者のかわや」と、町じゅうの人にかわいがられて、まずしいながらも楽しくくらしていました。

一八二二年のクリスマスもすんで、やがて年がくれようとする、十二月二十七日、そのかわやに男の子が生まれました。家の人は大へん喜んで、ルイという名をつけました。その子どもが、のちになって、世界に名を残すようなりっぱな仕事をするとは、だれも考えませんでした。

ルイがニオの時、一家をあげてアルボア市にひっこしをしました。やがて、その町で小学校へ通うようになりました。もって生ま

れた明かるさのために、先生からも、友だちからもかわいがられ、級長にされました。

ところが、物事に熱中するたちのルイは、自分のすきな魚つりと、絵を書くことにいっしょうけんめいで、勉強はあまり進みませんでした。先生や家の人から注意されても、自分がしようと思ったことのほかには、心を動かしません。あいかわらず、絵を書くことと、魚つりにいっしょうけんめいになっていました。

そんなルイも、一方では、大へん物事に感じやすい子どもで、やさしい心を持っていました。

ある日、友だちのてっぽうを借りて、近所の森にいき、一わのひばりをうち落としました。



「あ、落ちた。落ちた。」

ルイは喜んで、落ちたひばりを拾いあげると、手のひらにべっとりと血がつきました。その血のあたたかさを感じた時、自分は悪いことをしたと、急に悲しくなりました。このきずついたひばりをこのまますてて帰ったら、きっと、やまいぬにたべられてしまうだろう。なんとか助けるくふうはないものかと、だいて家に帰り、大事に手あてをしてやりました。けれど、ひばりはきずのために死んでしまいました。

ルイはなくなく死んだひばりを、森の中へ持っていきました。そして、うち落とした所の土をほって、ひばりをうずめてやりました。

また、十才の時、こんなこともありました。

町を通っていると、たくさんの人が集まっています。見ると農夫が、きょうけんびょうにかかった、やまいぬにかみつかれて、いま、その手あてをしてもらっているところです。まっかにやけた鉄のぼうをきず口にあてる時のジジーッという音、農夫の苦しそうな顔、そのさけび声。それを見たルイは、顔をあおくして、あわてて家へにげて帰りました。感じやすい少年の心に、この時、きょうけんびょうのおそろしさが、強く残ったにちがいありません。

そののち、ルイは何を考えたのか、すきな絵を書きながらも、一



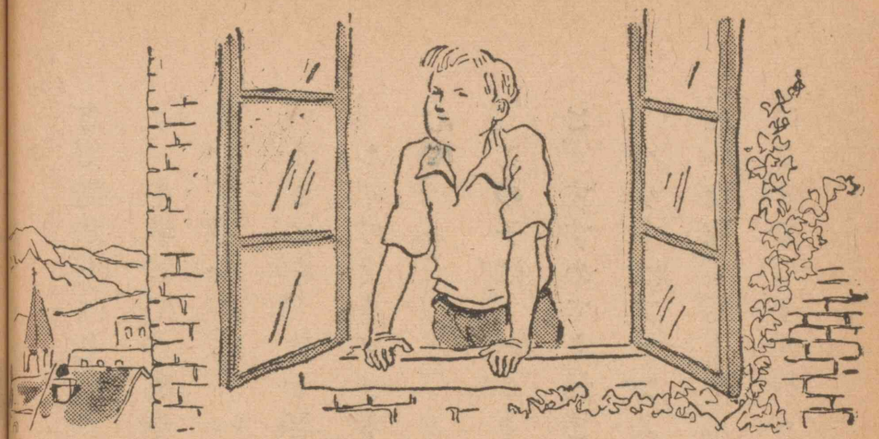
方で勉強をはじめました。ところが、勉強をはじめるとどうでしょう。中学校でも高等学校でも、すばらしくりっぱなせいせきをとりました。ルイは、いっしょうけんめいになると、なんでもできるということを、強く思うようになりました。

ルイのよくできることを知ったある人が、ある日ルイのおとうさんに、

「この子は、パリーにやって勉強させるといいよ」。

と、すすめてくれました。

パリーはフランスで一ばん文化の進んだ町です。美しい通り、きれいな家、たくさんの人、たいていの人はひとめで、パリーがすきになってしまうかも知れません。



ところが、ルイ少年にとっては、パリーがどんなに美しい町であっても、そんなことは少しもうれしいとは思えないのです。家の人といっしょにいることのしあわせを、いつも考えていました。しかし、たびたびすすめられて、とうとうパリーにいくことにしました。だが、パリーにいったルイは、少しもおちつきません。

「もう一度でいいから、あのかわのにおいがかぎたいなあ」。

と、いつもいっていました。ルイにとっては、家がどんなにまずしくてもいいのです。家の人



といっしょにいることができれば、それでよかったのです。親思いのルイはたまらなくなって、自分の家へ帰っていきました。家の人の顔を見たルイは、いっぺんに心がおちつきました。しかし、せっかく勉強をしにいっているのだからという、家の人の考えをすなおにきいて、また、パリーに出ていきました。それはルイの二十オの時でした。

今度は、ルイがどんなに強い決心をしたかは、ルイの勉強ぶりを見るとよくわかります。そのころから、ルイは科学の勉強がおもしろくなってきました。いままで、いっしょうけんめいに書いていた絵をやめて、科学の勉強をはじめました。図書室にはいって本を読むルイを、たびたび見るようになりました。友だちのねてしまった

あと、ひとりだけ勉強をつづけた夜もありました。

やがて、その努力はあらわれて、科学についての新しい考えを、つぎつぎに発表しました。

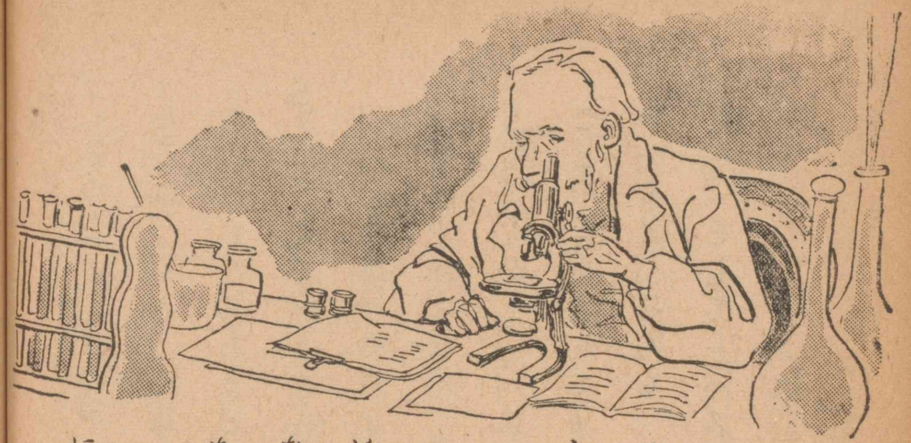
みなさんは、ぎゅうにゅうや酒を長い間ほっておくと、すっぱくなることを知っているでしょう。あれは自然になるものではありません。目に見えない生物が働いているのです。

パスツールは、一八五七年に麦やぶどうから酒を作る時に、目に見えない生物の働きがあることを発見しました。それから、パスツールは、なんでも自然に生まれるということはなくて、もとになるものがあるのだということを、強く考えるようになり、その研究をつづけていきました。



そのころ、世の中は、まだまだ進んでいません。多くの人は、ほたるは、くさった草から生まれるとか、うじは、くさった肉からわき出るものであるとか、かびは、自然にわくものであるとかいうように考えていました。

人とちがった考えをいっても、すぐには、人々はその通りだといってはくれません。パスツールも、ずいぶん人々から悪くいわれました。しかし、パスツールが発表したことは、みな、深く勉強したことから生まれてきたものです。パスツールの考えの正しいことがわかると、みんな、今までの考えが、まちがっていたことを知りました。そして、パスツールのすぐれた考えに感心してしまいました。パスツールの名は、一度に世界の国々にひびきわたりました。



しかし、パスツールは少しもじまんをしません。前とかわらないで、いっしょうけんめいに研究をつづけていきました。パスツールの心の中は、人のために世の中のためにということで、いっぱいだったのです。

そののち、流行性の病気には、病原体があるということや、きょうけんびょうの予防の仕方など、すぐれた研究を、つぎつぎに発表しました。

パスツールのすぐれた仕事を、記念するために、また、病原体の研究をつづけていくために、



パスツール研究所ができました。

一八九五年、パスツールは七十三オでなくなりました。

なくなるまで、世の中のため、人のためにと研究をつづけたパスツールは、安心しきって、心しずかにねむっていったのです。むねには、すぐれた仕事をたたえるくんしょうが、光っていました。

フランスの人だけでなく、世界中の人々はパスツールの死をどんなにおしんだことでしょう。しかし、パスツールの心は、考えは、今もパスツール研究所に生きて流れているのです。

## （五）アルプスの少年

### 一　モニイと子やぎ

アルプス山脈の中ほどに、フィデリスという小さな村があります。おんせんで名高いのですが、そこまで登るのはらくではありません。村でたった一けんのホテルが、村からはなれた小高い所に、ぽつんとさびしそうに立っています。

道の両がわには、目のとどくかぎり、スイスの高山植物が、目もさめるような色をしてさいています。見あげると、まっ白な雪をいただいたアルプスの山々がそびえています。



ある日、ふたりの新しいお客がホテルにつきました。一人は十五六の女の子で、もう一人はそのおばさんらしい人でした。夕食をすませて二人はホテルから出てきました。美しい夕景色に見とれていましたが、やがてちょう上にいく小道を、ゆっくり登りはじめました。

「おばさん、いい景色ですね。こんな景色をながめて、おんせんにはいっていたら、おばさんの病気もなおりましょうね」。

「そう、きっとなおりましょう。——おや、パウラや、かみかざりが落ちかかっていますよ」。

「はい、ありがとう。このかみかざりは、おばあさまの形見ですから、落としたら大へんですわ」。

二人は急にいただきの方を見あげました。上の方からいかにも楽

しそうな歌が聞えてきます。

「まあ、なんとじょうずでしょう。まるで、ねむっている山の目をさまさせるようです」。

山道の上の方から、やぎが一ぴき、また一ぴきととびだしてきました。どれも首に小さいすずをぶらさげて、それが歌にあわせて、ものやわらかな音をたてます。さいごに十一二ぐらいの少年が出てきました。

どんなに冬がつらくても、
悲しい顔はやめましょう。
春はまもなくまいります。
この世を楽しくするために。

「こんばんは」。と、少年は声をかけて通り過ぎました。

「ちょっと待ってくださいな。そのやぎはみんなあなたのもの」。

と、女の子はききました。

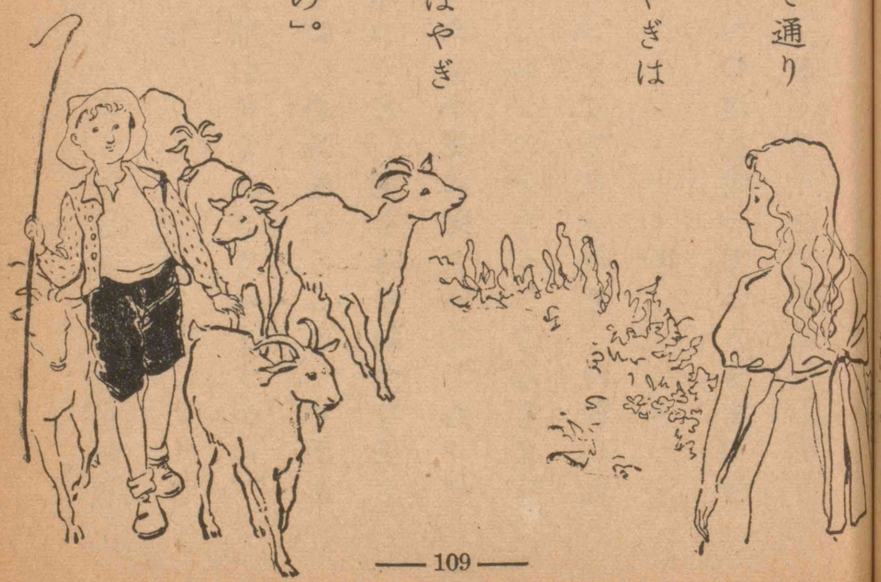
「いいえ、村の人たちのです。ぼくはやぎの番なのです」。

「毎日、山のてっぺんへ連れていくの」。

「ええ、そうです」。

「あなたのお名前はなんというの」。

「モニイです」。



「モニイさん、さっきの歌、みんなうたってくださらない。おわりのところを聞かなかったのよ」。

「またいつかうたいましょう。きょうはおそくなっていますから」。

モニイは、道草をくおうとするやぎに、むちをふりふり、ホテルへの小道をかけおりました。ホテルにつくと、毛なみの純白な子やぎと、まっ黒なめやぎを連れだして、やぎ小屋に向かいました。モニイは、この子やぎが一ばんすきです。ちびのメギイ、こんな名前をつけてやりました。メギイはまだじょうぶでないので、特別に気をつけてやっていました。

モニイは、残りのやぎを連れて、村への道を走っていきます。村に近づくと、つのぶえを力一ぱいふきならしました。音はいくども



こだまして、村の方へひびきわたります。すると子供たちは、ぞろぞろとびだして来て、めいめいのやぎをつれて帰ります。あとにはモニイの家のやぎだけが残ります。モニイはそれを連れて自分の家へ帰っていくのです。家の戸口には、いつでもおばあさんがむかえに出ています。モニイは、あかんぼうの時、両親をなくしました。それからは、おばあさんの手一つで育ったのです。去年から村のやぎかいになりましたが、少しは家のくらしを、助けることができるようになりました。

朝、家を出る時、おばあさんがいつもこういいます。

「モニイよ、人が見ていなくても、正直に自分の仕事をするのですよ。正しいことをしていたら、きっとりっぱな人になれます」。

モニイは、おばあさんの言葉を守って、元気一ぱいで山に登っていきます。

## 二　子やぎのぼうけん

よく朝、パウラは、ホテルの中庭から聞えてくる歌声で、目がさめました。

「あら、やぎかいのモニイさんだわ」。と、まどぎわにかけよって、のぞいてみました。モニイが黒やぎと子やぎを、やぎ小屋からひき出すところでした。やがて、むちをふりふりやぎの後について、元気よくうたいながら登っていきます。

まつのこずえのてっぺんで、



小鳥もいっしょにうたってる。

お日さまにこにこ顔出すと、

雪雲こそこそにげていく。

登るにしたがって、見はらしは一そうよくなっていきます。モニイは、「見はらし台」といわれる場所につきました。ここに立つと、どこまでも、一目に見えます。

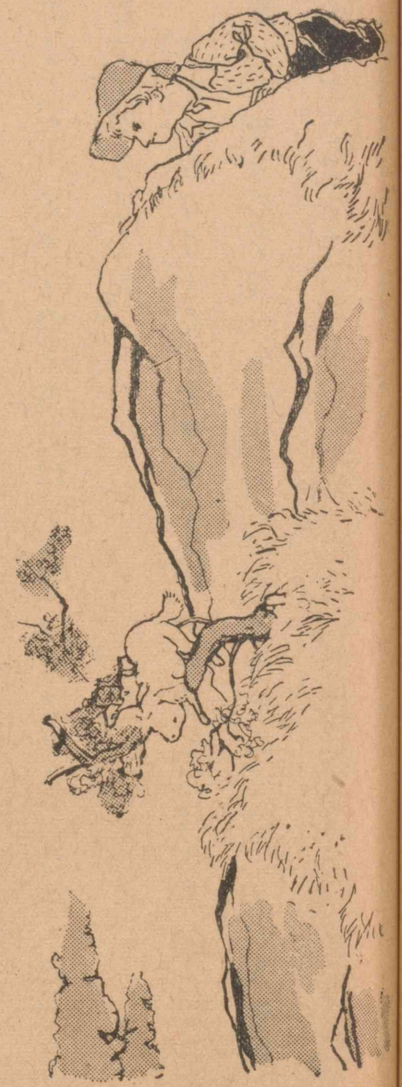
モニイは、草の上にこしをおろしました。ちびのメギイは、かけよってきて、かたにからだをこすりつけたり、まわりをとびまわったりして、喜びます。

その日の午後、「りゅうの岩」にいってみようと思いたちました。そこは一ばんやわらかい草のあるところで、「見はらし台」から左手

の方へ、けわしい坂道を登らなければなりません。やぎを先頭にしたり、自分が先頭になったりしながら登っていきました。けわしい坂になると、メギイをだきあげてやります。やっとつきました。やぎはみんなうれしそうにして、新しい草にとびついていきました。モニイは、しばらくまわりの景色をながめていました。ふと気がつくと、ちびのメギイがいません。母親の黒やぎは、草もくわず、きょろきょろしています。モニイはとんでいきました。

「黒や、ちびはどこへいった」と、声をかけてみましたが、どこにも、メギイのすがたが見えません。はるか下の方から、かすかなやぎのなき声が聞えます。モニイはがけへとんでいって、はらばいになって、きりたったぜっぺきの下をのぞいてみました。すると、ぜっ





ぺきのとちゅうの木にひっかかって、動いているものがあります。あぶないこともわすれて、からだをのり出してみました。ちびのメギイです。横ざまにぜっぺきからはえた木のえだに、ひっかかっています。悲しそうな声をあげて、ないていました。

「メギイ、しっかりつかまっていろ、すぐ助けにいくから」。

モニイはおりていく方法を考えました。メギイのひっかかってい

る所は、ちょうど「雨やどり岩」の上にあたります。あの岩の所からだといけそうです。モニイは坂をくだって、その岩の所へいきました。見あげると、からだがふるえるほどおそろしいがけです。しかし、思いきって登っていきました。木に手をのばし、ふるえている子やぎを、自分のかたにうつしました。地面にやっと足のついたとき、うれしさのあまり、「たすかったぞ、メギイ」。と、思わずさけびました。メギイのふるえはまだとまりません。モニイはやさしくなでてやりました。

夕方になりました。ホテルでは、パウラとおばさんが、モニイの帰って来るのを待っていました。そこへモニイは、子やぎをだいておりてきました。



「子やぎが病気？」と、パウラはたずねました。モニイはふたりに、ちびのぼうけんをくわしく話しました。パウラは、メギイをいくどもなでてやりました。

「モニイさん、あの歌をうたってくれませんか。」

「うたいましょう。」

モニイは、子やぎをだきながら、喜びの心をこめてうたいました。

一　まつのこずえのてっぺんで、
　小鳥もいっしょにうたってる。
　お日さまにこにこ顔出すと、
　雪雲こそこそにげていく。

二　お空にかがやく

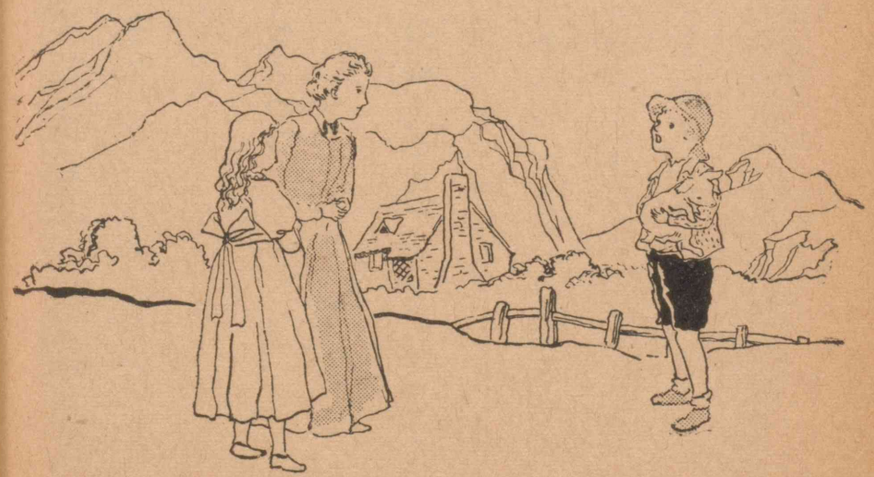
お星さま。
それは神のおくりもの。
心を明かるくいたします。

三

夏がきたら、
いちごをつもう。
赤いいちごや黒いちご、
すきな色のいちごをつもう。

四

どんなに冬がつらくても、
悲しい顔はやめましょう。
春はまもなくまいります。
この世を楽しくするために。





## 三　モニイとジョデイ

ある晴れわたった朝のことでした。モニイがやぎを連れて、「りゅうの岩」にいっていると、下から二ひきのやぎを連れて、登ってくる少年がありました。それは友だちのジョデイでした。

「ねえ、モニイくん、ぼくはきみをさがしていたんだよ」。

「ジョデイくん、なにか用事なの」。

「いや、きみにお話しようと思ってやってきたんだよ。いまホテルへ、このニひきのやぎを連れていくところさ。ホテルのご主人が、このうちの一ぴきがほしいといっているんだ」。

「そのやぎは、きみのもの」。

「そうさ。ぼくはもう他人のやぎなんか、世話をしなくてもよくなったんだよ」。
モニイはびっくりしました。このふたりは、同じ時に、おなじように、やぎかいになったのでした。
「じゃ、きみは、やぎかいをやめて、何をやっているんだい」。
「ぼくは今、たまご売りさ。毎日、ホテルや町へいくのだよ。うらやましいだろう」。
「わからないなあ。ぼくはやぎかいの方が、ずっといいと思うね。山はいつだってこんなに美しいし、やぎはかわいいし」。
「モニイくん、考えてみたまえ。やぎかいが、なんでおもしろい。ただの五分間だって安心ができないだろう。ほら、あのやぎが、



がけから落ちはしないか、このやぎがけがはしないかと、心配のしどおしだろう。そんなに心配することがおもしろいかい」。
「ぼくは、ちびのメギイがすきなんだ。あれとぼくはなかよしだもの、なかよしと遊んでいるのが一ばんおもしろいよ」。
「なあんだ、あのちびか。あれはあんまりからだがよわいので、ホテルのご主人が、ぼくのおとうさんに売りたがっているんだよ。でも、おとうさんは買おうとはいわないので、主人もこまって、近いうちに肉屋に売ってしまって、そのかわりに、ぼくの連れているのを一ぴき買うことになったんだよ」。
モニイは、びつくりして、ものがいえませんでした。
「そんなことができるものか。肉屋にやるなんて、そんなむちゃな

ことは、ぼくがけっしてさせないよ」。
「だめだよ、モニイくん。ちびはホテルのものなんだ。もう殺すことにきまっているんだ。ところで、ぼくの手の中を見たまえ」。
ジョデイは、日光にかがやく玉のついたものを、出して見せました。モニイが見たこともない美しいものでした。
「なに」。
「これは、きれいな石のついたかみかざりさ」。
「だれからもらったの」。
「もらったんじゃない。拾ったんだよ」。
「どこで拾ったの」。



「ホテルのすぐ下の方で。ほしいだろう」。
「きみ、それはホテルのご主人にとどけなければいけないよ。きっとお客さんが落としたのにちがいない。落とした人はこまっているだろう。ぼくがとどけてやろう」。
「そんなことをしてもらったら、ぼくがこまるよ。町の金持に売ろうと思っているんだ。百円ぐらいには売れるよ。きみに三十円あげるから、だまっていてね」。
「ぼくは、お金なんかほしくない。そんな正しくないことをするのは、きらいだ。きみがとどけなければ、ぼくが話してあげる」。
ジョデイは、こまった顔をして考えこんでいましたが、急に勢こんで話しかけました。

「モニイくん、きみはちびのメギイの殺されるのがいやだろう。もしきみが、このことをホテルのご主人に話さないとやくそくするなら、ぼくはおとうさんにたのんで、メギイを買ってもらうことにしよう。メギイがぼくのうちのものになれば、殺される心配はないよ。どうだいモニイくん」。

モニイは、そんな悪いことに耳をかそうとは、少しも思っていませんでした。だが、からだをすりつけてくるメギイを見ていると、かわいそうでなりません。

「だまっているよ、ジョディくん」。

「きっとだよ、モニイくん」。

「そのかわりに、ちびを買ってくださるようにたのんでね」。



モニイは、それっきりだまってしまいました。

「じゃ、さきに帰るよ」。と、ジョディは、ゆかいそうに、二ひきのやぎを連れて、山をくだりました。モニイは見送ろうともせず、メギイをだいたまま、長い間、ぼんやりすわっていました。

## 四　歌をわすれたモニイ

よく朝、モニイは頭がいたいといって、なかなか起きませんでした。それは、夜、よくねむれなかったからです。おばあさんは、

「かげんでもわるいのかい、モニイ」。とききました。

「メギイのことを心配したので、あたまが少しいたかったのです。もうなおりました」。

「メギイのことは心配しなくてもいいよ。一日まじに、元気になっているから。だが、いつでも正しいことをするのだよ。モニイ」。

モニイは、やぎを連れて家を出ました。が、いつものように、楽しそうな歌は出ませんでした。

ホテルのお客たちは、モニイの歌が聞えないので、まだねむっています。パウラだけは起きて、まどぎわにすわって、外をながめていました。モニイは、こっそりとやぎ小屋から、黒やぎとちびとをひきだしています。いつもとちがって、なにか考えこんでいるようでした。パウラは、もしかしたら、おばあさんが病気なのではないかと思いました。

モニイは生まれてはじめて、こんなふゆかいな気持をあじわいま



した。いつもなら、登れば登るほど気持がよくなって、思わずうたいたくなるのですが、けさは、むねがふさがったようで、歌なんか出ません。

雨がふってきました。モニイは気のぬけたように、「雨やどり岩」の下に、ぼんやりすわっていました。そうして、きのう、ジョデイと話したことをひとつひとつ思いだして考えました。

「ジョデイが、あの美しいかみかざりを返さないのは、ぬす人と同じだ。それをだまって見ている自分はどうだろうか——。メギイを助けるためではあるが、正しいとはいえない気がする。メギイは殺されても、かみかざりを返させるのが正しいことである。そうだ、ジョデイに正しいことをさせよう。ホテルのご主人にとど

けよう」。
モニイは、ようやく心が決まりました。
夕方になりました。モニイはやぎを連れて、山をくだりました。
ホテルの中庭にはいった時、パウラは急いで出てきました。
「モニイさん、どうかしたの。どうしてそんなに元気がないの。歌が聞えないわ」。
「うたえないのです。それよりも、ホテルのご主人におとどけしたいことがあるのです」。
「とどけるって、わたしに話してくださらない」。
「それは、きれいなものを拾ったので、とどけたいのです」。
「まあ、モニイさん、それは、かみかざりでしょう」。



「ええ、そうです」。
「まあ、なんとしあわせなことでしょう。そのかみかざりは、わたしのよ。さあ、ちょうだい」。
「ぼくじゃありません。ぼくの友だちのジョデイが拾ったのです。ぼくは、ジョデイからきいたのです」。
「どこにいるの、すぐ、だれかを使いに出しましょう」。
「使いを出さなくてもいいのです。ぼくがいつてきます。ジョデイはまだ持っていると思います」。
「モニイさん、ジョデイさんに、お礼を五百円あげるといってください」。
「えつ、五百円ですって」。とモニイは、目をまるくしました。が、

また思いかえして、
「おかねはどうでもいいのです。拾ったものは、お返しするのがあたりまえです。うちのおばあさんは、正しいことをせよと、いつもいってきかせてくれます」。
モニイは、やぎを連れて自分の村へ帰っていきました。やぎのしまつがすむと、大きい声で、
「おばあさん、ぼくはこれからジョデイくんの家へいってきます」。
と、元気よく走っていきました。
「モニイは、元気をとりもどしたようだ」。
と、おばあさんは、ほっとしたような顔色でした。



## 五　モニイ楽しくうたう

そのばん、パウラはホテルの主人と何か話していました。よく朝早く、モニイがやぎを連れて、ホテルに来た時、パウラは起きていました。
「持ってまいりました」。と、モニイは、遠くからさけびました。
「待っていましたわ、モニイさん、それはわたくしの大事なものよ。なくなったおばあさんの形見です。ありがとう。ありがとう」。
「どうしまして。ジョデイくんからことずかったんです」。
「ジョデイさんにもお礼しますよ。あなたにもお礼しますが、それよりさきにききたいのは、モニイさん、あなたはどうしてうたわな

いようになったのです。おばあさんでも病気になったのではない」。
「おばあさんはたっしゃです。うたえないのです」。
と、悲しそうにこたえました。
「うたおうとすると、きっとメギイのことが思いだされます。メギイは近いうちに、肉屋にやられるときいています。かわいそうで、歌なんかうたえませんよ」。
「わかりました。モニイさん、大事なかみかざりが返ったので、あなたにもお礼をさしあげます。さあ、モニイさん、いってちびのメギイを連れておいで。あれはきょうから、あなたのものです」。
「えっ、どうしてメギイがぼくのものになるのですか」。
「それはね、ホテルのご主人に相談して、わたしがメギイを買ったのですよ。モニイさんにあげるといったら、よろこんで売ってくれました。メギイはきょうからあなたのものなのよ」。
「それなら、メギイはぼくのものになったのですか。メギイがぼくのものに」。
モニイは、ゴムまりのように空にとびあがりました。それからやぎ小屋にいって、メギイを両手にだいて来ました。

「おじょうさん、ほんとに、ありがとうございます」。
モニイは、山道をうたって登りました。
そして、「みはらし台」の所に、やぎを連

れていきました。

下をながめると、ホテルの中庭に立って、手をふっているパウラが見えました。モニイはメギイをだいたまま、ぼうしをふりました。

モニイは、あらんかぎりの力をこめて、喜びにあふれた声でうたいました。

どんなに冬がつらくても、
悲しい顔はやめましょう。
春はまもなくまいります。
この世を楽しくするために。



## お仕事の手びき

(一) 文化の日

1 文化の日とは、どんな日ですか。まさおくんたちの学校では、文化の日にどんなことがありましたか。

2 白鳥物語のところを研究しましょう。

(イ) シナリオは、えいがの一つ一つの場面を書いたもので、ふつうの文の書き表わしかたとは、たいへんちがっています。つぎの中で、シナリオの書き表わしかたと思われるものに、○をつけなさい。

△ぷつぷつ切れている。
△心持がくわしく書いてある。
△ひろがっていった、流れていったという書き表わしかたでなく、ひろがっていく、流れていくというように書き表わされている。
△目に見えるように書いてある。
△かたいとか、つめたいとかいうように、からだで感じたことが、よく書き表わされている。
△はげしい風、たおれる木というよう

に、おしまいがものの名で切ってあることが多い。

また、どうしてそんな書き表わしかたがしてあるかを、考えてみましょう。

(ロ) 白鳥物語のシナリオを読んで、みなさんは、みにくいあひるの子のことを、どう思いましたか。

(ハ) えいがができるまでには、いろいろの道すじを通ります。どんなにしてえいがができるか、調べてみましょう。

(ニ) 白鳥物語の一つ一つの場面の絵を書いて、つなぎ合わせてみましょう。

3 はいくの話のところを研究しましょう。

(イ) はいくとは、どんなものですか。

(ロ) あとの方にあげてある、はいくをよく読んで、「秋のくれ」のように、作文にしてみましょう。また、そのようすを、絵に書いてごらんなさい。

(ハ) はいくには、「きご」といって、そのきせつを表わすことばを、読みいれるしきたりになっています。つぎのはいくでは、どれが「きご」でしょうか。

△「こめあらう……。」——

△「もらいくる……。」——



△「うめ一りん……。」——

(ニ) みなさんもてちょうをようういして、心の動いた時々に、はいくを作ってごらんなさい。

(二) 漢字と新しいかなづかい

1 「漢字」のところを読んでつぎのことをはっきりしておきましょう。

(イ) 漢字とはどんなものか。

(ロ) かなとどんなところが、ちがうか。

(ハ) 漢字を作った人はだれか。

(ニ) 漢字の数はどのくらいあるか。

(ホ) 漢字の音訓というのはどんなことか。

(ヘ) 小中学校で必要な漢字の数はいくつか。

2 いままで習ったいろいろな漢字について、その音と訓を調べてみよう。

3 わからない漢字を調べるのには、ふつ

うじしょ（じびき、じてん）を使うのがよい。じしょには使い方がある。どのじしも同じとはかぎらない。いろいろなじしょについて研究してみなさい。

4 「読めないかなづかい」について研究してみよう。

(イ) 古い書き方と、いまの書き方のちがいはどんなところであろうか。

(ロ) いまの書き方で、発音通りになっていないものが、いくつかある。それを国語の本について調べてみよう。

(ハ) かなづかいの特別のきまりについて、研究しなさい。

(ニ) 「かなづかい」の「づかい」は「ずかい」と書くはずなのに「づかい」となっているのは、「かなつかい」が「かなづかい」というように、にごったものだからである。「気づく」も「気つく」のにごったものだから「気ずく」とは書かない。ほかにもこんなものが、たくさんある。いろいろ集めてみよう。



(三) 冬の生活

1 冬の夕ぐれをよく読みましょう。

(イ) 冬の夕ぐれらしいようすは、どんなに書き表わされていますか。

(ロ) この文には冬の夕ぐれのいろいろな場面が書いてあります。それを絵に書いてみましょう。

2 つぎに書いたことがらで、炭やきにかんけいのあるものに○をつけなさい。

ところどころまつの木も見えます。

白いけむりが、むくむくと出ています。

大きな木が切りたおされました。

炭がまの口から、木をつめています。

しもどけの道。

働く喜びがあふれています。

スキーにいった」のところで、スキーのおもしろいところ、いさましいところはどんなに書き表わされていますか。

おもしろい

いさましい

4 冬の運動について、作文を書きましょう。

5 「冬ごもり」というのはどんなことですか。また、ここではなんの冬ごもりにつ

いて書いてあるのですか。

6　このほかのものの冬ごもりについても調べてごらんなさい。調べたら、そのことを作文に書きましょう。

7　まさおくんは、わからないことはなんでも調べてみよう、とする心がけを持っていますね。それがこの文のどんなところで、わかりますか。

(四)　まさおくんの病気

1　「まさおくんの病気」のところをよく読みましょう。

(イ)　おかあさんのやさしい気持は、どんなところでわかりますか。

(ロ)　病気になったまさおくんは、どんな気持だったでしょう。

2　「おいしゃさんの話」について、つぎのことを調べましょう。

(イ)　おいしゃさんはどうして、まさおくんがフットボールをしたあと、あせをふかなかったということがわかりましたか。



(ロ)　どういうことから、かぜをひくのでしょうか。

(ハ)　かぜをひかないようにするには、どうしたらよいのでしょうか。

(ニ)　人間のからだは、つごうよくできているというのは、どんなことでしょうか。

(ホ)　病気にかからぬ一ばんだいじなことはどんなことですか。

3　「かぜのなおるころ」は、放送げきの台本です。ふつうのげきの台本と比べて、つぎのことがらのうち放送げきの方には○、ふつうのげきの方には△をつけましょう。

・見るげき
・きくげき
・せつめいは動作がわかるように書く
・せつめいは音楽などのことを書く
・ぶたいのことやでてくる人の場所などを書く
・お話だけで動作がわかるように書く

4　この台本を学校放送などでしてみましょう。そのとき、人の歩く音や、いすにすわるときの音などを、くふうしてく

ださい。音楽はこのげきにあうものをえらぶことがだいじです。

5　このげきは、大きくわけると、三つの場めんになります。「姉とまさおの話しあい」「友だちがみまいに来て」「もんしろのたんじょう」です。このうち、一ばんしまいの仕方をよく研究してみましょう。

6　「ルイ・パスツール」を読んで、つぎのことを研究しましょう。

(イ)　パスツールの七十回目のたんじょう日に、多くの人の前で話したのは、どんなことですか。

(ロ)　パスツールの二才のときに、どんなことがありましたか。

(ハ)　パスツールが十才のときに、どんなことがありましたか。

(ニ)　パスツールの研究のもとになったのは、どんな考えですか。

(ホ)　おいしゃさんについてのいろいろな伝記を読みましょう。



(五)　アルプスの少年

1　「アルプスの少年」を、はじめからおわりまで、お話のできるように、くりかえして読みなさい。

2　この文にでている人で、この話の主人こうとも思われる人には、名前の上に、⊙をつけなさい。

それらの人々が、文の中にでているときには、名前の下に○をつけなさい。男か女かもかきなさい。

| | 一、モニイと子やぎ | 二、子やぎのぼうけん | 三、モニイとジョデイ | 四、歌をわすれたモニイ | 五、モニイ楽しくうたう | 男か女か |
|---|---|---|---|---|---|---|
| モニイ | | | | | | |
| ホテルの主人 | | | | | | |
| モニイのおばあさん | | | | | | |
| パウラ | | | | | | |
| パウラのおばさん | | | | | | |
| ジョデイ | | | | | | |

3　「モニイと子やぎ」のところで、

○一年中でいつごろの話ですか、

春　夏　秋　冬（○をつけなさい。）

○パウラたちは、何の用事でホテルにき

ているのですか。つぎのことばの上に○をつけなさい。

遊びにきている。

おんせんにはいりにきている。

病気をなおしにきている。

○モニイの毎日のお仕事は何ですか。（○をつけなさい。）

おひゃくしょうさん

ホテルのおてつだいの人

ひつじかい

○モニイのおばあさんのりっぱな人であることが、どうしてわかりますか。

4　ジョディは、モニイの所に、何のためにきたのですか。モニイとジョディと、その心がけを比べてごらん。

5　つぎの文を、お話のわかるようにならべてごらん。

○かみかざりをパウラに返しました。

○自分の考え方のまちがっていたことに気がついて、ジョディの家にいきました。

○モニイは、子やぎを助けたいばかりに一ど正しくないやくそくをしました。

## 新しく出たことば


あいて……33
あいし（あいする）……41
あおいで（あおぐ）……34
あかり……43
あくび……4
あし……8
あせ……51
あひる（おやあひる）……4
あめしぶき……13
あやつって……53
アルプス……106
アルボアし……95
あんまり……9
いいつけ……70
いきおいこんで（いきおいこむ）……123
いきもの……63
いじょう……28
いしゃ（おいしゃさん）……69
いただき……107
いや……124
うじ……103
うすれて（うすれる）……50
うちがわ……75
うなづき（うなづく）……68
うらやましそう……54
うわぎ……74
うわすべり……64
えり……42
おうむ……33
おうぎ……34
おおやまけん一……84
おそろしさ（おそろしい）……98
おとな……82
おとずれ……43
オーバー……42
おもいかえして（おもいかえす）……130
おやおもい……101
おれる……52
おんせん……106
かいしゃ……42
かいじょう……93
かえで……61
かがく……101
かき……11
かぎたい（かぐ）……100
かげん……125

かし……24
かすか……114
かぜ……69
かた……60
かたみ……107
かって(ごかって)……6
かっこう……7
かなづかい……26
かなり……58
かばん……76
かび……103
かま……46
かま……48
がまん……11
かみかざり……107
かも……12
かわいた(かわく)……42
かわや……95
かんじ……26
きず……62
ぎっしり……49
きねん……104
きぶん……68
きぼう……94
ぎゅうにゅう……102
きょうけんびょう……98
ぎょうずい……24
きりそこなって(きりそこなう)……64
くせ……74
くび……85
くらし……111
くらべて(くらべる)……31
クリスマス……95
くるった(くるう)……15
クワックワッ……8
くん……29
くんしょう……105
けいしゃ……53
けだもの……28
けなみ……110
けんか……20
こうとうがっこう……99
こうもん……58
こくみんたいいくたいかい……57
こごえじに……16
こころのこり……60
こだま……48
こずえ……112
こそこそ……113
こなゆき……52
こばやしいっさ……19
ごぶさた……82
こめて(こめる)……117
こんちゅう……85
さいご……108



さいわい……70
さまざま……53
さらに……73
ざわざわ……25
さんみゃく……106
しあい……83
しかた……66
しずまりかえり……50
しせい……8
しぜん……20
じだい……27
したぎ……74
しちめんちょう……6
じっけん……94
シナリオ……4
しぶき……15
しまつ……130
しもどけ……51
ジャンプ……54
じゅう……53
しゅうかじょう……51
じゅんばく……110
ジョディ……119
しゅつじょう……57
しょっかく……89
じょうくう……12
じょうはつ……73
ずいぶん……7
すきま……14
スキージョう……53
すっぱく(すっぱい)……102
すりつけて(すりつける)……124
すみやき……46
すわる……7
せいどう……55
せいせき……99
せいぶつ……102
ぜっぺき……114
せつめい……11
ぜひ……76
せまって(せまる)……22
せりふ……92
せんとう……114
センター……72
ぞうきん……35
そうけつ……28
ぞうきばやし……46
たいおん……73
たいくつ……78
だいとうりょう……93
たきぐち……47
たたえる……93
たち……96
たっしゃ……132
たにあい……52

たもたれる……73
ち……40
ちゃ……87
ちゅうごく……28
ちゅうがっこう……31
ちょうじょう……107
ちょうせつ……73
つのぶえ……110
つばき……17
つらくても(つらい)……108
てあて……97
てつ……98
てっぺん……109
てのひら……97
テーブル……43
でんちゅう……42
でんとう……43
ドイツ……95
とけい……89
とじられ(とじる)……49
とたん……17
ドッジボール……82
とどけて(とどける)……123
とぼとぼ……16
ともし(ともす)……23
とりくむ……51
どりょく……94
なおる……77
ながなが……25
なにしろ……28
ならう……23
にんげん……66
ぬすびと……127
ぬって(ぬう)……56
ぬま……12
ねつ(おねつ)……68
ねっちゅう……72
のうふ……14
のきば……67
のこぎり……48
のたりのたり……23
のど……69
はいく……19
バウラ……107
はくちょう……4
はさき……13
はさみ……64
バスツールけんきゅうじょ……105
はちきれる……64
はつおん……37



はっけん……102
はな……13
はるか……114
バリー……99
ばん……109
ひえる……44
ひざし……17
ひじょう(に)……31
ひたい……68
ひつよう……31
ひな……5
ひねもす……23
びょうげんたい……75
フィデリス……106
ふくらませて(ふくらませる)……10
ふさがった……127
ふすま……67
フットボール……72
ふぶき……16
ふゆかい……126
ふゆがわら……25
ふゆごもり……58
ふるい……34
ぶんか……4
へいき……74
へいぜい……76
へいわ……94
べっとり……97
ほうそう……92
ほうほう……115
ぼかされて(ぼかされる)……21
ホテル……106
ほそぼそ……50
ほり……24
まいこんで(まいこむ)……14
まくらもと……67
まさかり……48
まずしい……95
まつばやし……52
まとめて(まとめる)……22
まもる……70
みかた……20
みがまえ……14
みずまくら……77
みずうみ……4
みちくさ……110
みにくい……7
みのむし……61
みゃく……69
むち……110
むちゃ……121
むらざと……46
むれ……12

めいげつ……24
めいわく……75
めりめり……47
もしかしたら……126
モニイ……106
ものすごい……56
ものほしざお……62
ものごと……96
やぎかい……111
やたらに……30
やまいぬ……97
ゆうぎり……21
ゆかい……57
ゆるやか……46
ようじょう……81
よこざま……115
よせ(よ)……60
よぼう……104
りゅうこうせい……75
ルイ・バスツール……93
ローマじ……41
わあー……80
わすれる……51
わださん……82
わりに……62



## 漢字

化(4)
鳥(4)
出(5)
説(11)
鼻(13)
農(14)
屋(14)
何(14)
約(19)
組(20)
毒(20)
然(20)
同(21)
消(21)
静(22)
習(23)
漢(26)
使(26)
代(27)
以(28)
伝(28)
問(28)
題(28)
訓(29)
比(31)
必(31)
要(31)
板(32)
古(34)
特(39)
別(39)
血(40)
正(41)
愛(41)
社(42)
転(42)
具(45)
炭(46)
里(46)
林(46)
続(46)
渡(49)
俵(50)
過(52)
練(53)
由(53)
横(54)
制(55)
民(57)
期(58)
局(58)
茅(65)
湯(67)
鳴(67)
熱(68)
脈(69)
悲(69)
守(70)
温(73)
節(73)
防(75)
性(75)
姉(77)
養(81)
試(83)
首(85)
貝(86)
放(92)
不(93)
統(93)
領(93)
希(94)
和(94)
努(94)
直(95)
才(95)
市(95)
鉄(98)
等(99)
科(101)
酒(102)
予(104)
念(104)
植(106)
純(110)
供(111)
言(112)
午(113)
坂(114)
法(114)
神(118)
殺(122)
円(123)

# 国語四年生下の編修について

一、本書は、教育基本法、学校教育法、学習指導要領一般編、同国語科編、小学校国語科検定規準などの趣旨を具体的にあらわすことにつとめた。児童の興味や生活経験や心理的発達に即して、単元学習をはかっているのもこのためである。

二、四年生用は上・下二冊とし、上は四月から十月まで、下は十一月から三月までに学習するよう構成されている。

三、本書は五単元からなっている。「文化の日」では、文化の日を中心にして具体的な文化財にふれ、廣い教養を身につけ、「漢字と新しいかなづかい」では、国語の表記法の問題を生活経験の中に処理し、「冬の生活」では、季節感と、冬の科学ともいうべきものを考え、「まさおくんの病氣」では、衛生的な知識と技能を経験を通して体得し、「アルプスの少年」では長編読解の力を養うことをめあてとしている。これらの五単元は、国語の学習活動をもととしながら、興味の幅を世界的なものに拡充し、科学的なものへの探究を心がけている。生活単元と要素単元との調和に、特別の注意を拂っているのは深く考えてのことである。

四、本書の新出語いは総数二八一語である。文章は敬体をもととしながら、常体口語になれることをも考え、その基本的なものを出している。児童の生活語を用い、正確な表現を、同時に、美的な表現をとっているのも、ひとつの注意点である。

五、かなは、平がなを本体とし、擬声語、擬態語、外国語を写す場合にのみ、かたかなを用いている。漢字は新出九九字である。児童に親しみやすいもの、社会的必要度の高いものを選んでいる。

六、巻末に語い表と「お仕事の手びき」をのせて、学習と指導の便をはかっている。「お仕事の手びき」は、ひとつの例をあげたのであって、これから、さまざまな学習活動がなされることを期待している。



Copyright 1949, by
The Gakkō Tosho Kenkyukai

*All rights reserved*
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国408

国語四年生　下

Approved by Ministry of Education
(Date Jul. 5, 1949)

**感謝のことば**

「かぜのなおるころ」……青木謙明氏作
「アルプスの少年」……白木　茂氏訳
右の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者の方に厚く感謝申しあげます。

**編者**
広島市東千田町
広島高等師範学校附属小学校内
財団法人 学校図書研究会

執筆担当者　広島高等師範学校教諭
今石光美
大西久一
小川利雄
原田直茂
田原輝夫
新井五郎

**表紙とさしえ**

昭和二十四年七月七日印刷
昭和二十四年五月九日発行

定価　円　銭

著作者　財団法人 学校図書研究会
広島市平千田町広島高師附属小学校内
会長　森岡文策

発行者　学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地
代表者　川口芳太郎

印刷者　図書印刷株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地
代表者　川口芳太郎

発行所
東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無断發行を禁ずる

広島大学図書
0130449924
広島大学図書
0130449924